The Molecular Biology Society of Japan
MBSJ NEWS
日本分子生物学会
2013.2
No.104

会報

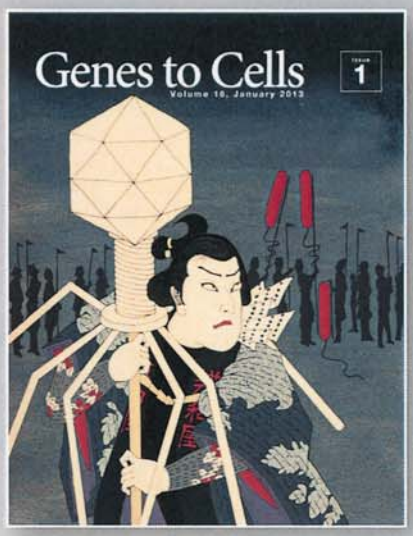
目　次

■ 第 18 期理事長挨拶 ―― 1
■ 第 18 期役員・幹事・各委員会名簿 ―― 3
■ 高等学校との連携による社会貢献活動について ―― 4
（高校などへの講師派遣事業）
■ 国際会議支援システム利用について ―― 4
■ 第 36 回（2013 年）日本分子生物学会年会　開催のお知らせ（その 1）― 5
■ 第 35 回日本分子生物学会年会（福岡）の報告 ―― 12
■ 第 35 回年会・男女共同参画企画開催報告 ―― 13
■ 男女共同参画委員会・年会における発表者の属性統計調査報告 ―― 16
■ 研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告 ―― 17
■ 第 18 期新理事会準備会議記録 ―― 26
■ 第 17 期第 3 回理事会記録 ―― 27
■ 第 17 期・第 18 期合同理事会記録 ―― 31
■ 平成 25 年度（第 35 回）通常総会記録 ―― 38
■ 平成 24 年度（2012 年度）収支決算報告 ―― 41
■ 監査報告書 ―― 46
■ 平成 25 年度（2013 年度）収支予算 ―― 47
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について ―― 48
■ 研究助成一覧 ―― 48
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ―― 52
○第 15 回マリンバイオテクノロジー学会大会
○酵母からのエピジェネティクス研究へのメッセージ
～酵母が明らかにする生命科学の最先端～
■ 賛助会員芳名 ―― 53

MBSJ

特定非営利活動法人
日本分子生物学会
http://www.mbsj.jp/

Genes to Cells



Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida
Frequency: Monthly | **Impact Factor:** 2.680

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や、先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界で4,000以上の機関で読まれており、年間12,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells　投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- 出版されると直ちに無償公開となるオープンアクセスオプション『OnlineOpen』（有料）をご利用いただけます
- 2012年9月より、全ての総説は日本分子生物学会が費用を負担してOnlineOpen で公開中

オンライン投稿はこちら
http://mc.manuscriptcentral.com/gtc

2011年・2012年出版　引用数TOP論文　*2012年12月現在

Molecular mechanisms of the Keap1-Nrf2 pathway in stress response and cancer evolution (Volume 16, Issue 2)
Taguchi, K; Motohashi, H; Yamamoto, M

Nitro-fatty acids and cyclopentenone prostaglandins share strategies to activate the Keap1-Nrf2 system: a study using green fluorescent protein transgenic zebrafish (Volume 16, Issue 1)
Tsujita, T; Li, L; Nakajima, H; Iwamoto, N; Nakajima-Takagi, Y; Ohashi, K; Kawakami, K; Kumagai, Y; Freeman, B; Yamamoto, M; Kobayashi, M

Lectin microarray analysis of pluripotent and multipotent stem cells (Volume 16, Issue 1)
Toyoda, M; Yamazaki-Inoue, M; Itakura, Y; Kuno, A; Ogawa, T; Yamada, M; Akutsu, H; Takahashi, Y; Kanzaki, S; Narimatsu, H; Hirabayashi, J; Umezawa, A

ジャーナル閲覧ページ
www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc
日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。
ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。
日本分子生物学会事務局：info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、
Wiley-Blackwellカスタマーサービスにて承ります。
Wiley-Blackwellカスタマーサービス：cs-japan@wiley.com

WILEY-BLACKWELL

第 18 期理事長挨拶

会員の皆様へ

新しい年が始まりました。今年から第 18 期の日本分子生物学会の理事長を仰せつかりました東北大学の大隅典子です。これから 2 年の間、どうぞよろしくお願いいたします。

日本分子生物学会は 1978 年に初代会長渡邊格先生に賛同された約 600 名の方々により誕生しました。現在の会員数は 1 万 5 千名を超え、生命科学系では日本でもっとも大きな学会に成長し、体制も任意団体から NPO 法人へと変り、学会を構成する人的多様性も増しました。このような中で、第 17 期は小原理事長の許、副理事長を務めておりましたが、今期あらためて本学会の運営をお預かりする責任を感じています。

まず、ここで一つお詫びをしなければなりません。2012 年の福岡年会（阿形清和年会長）の前にお送りしました会員一斉メール（12 月 3 日付）の中に不適切な文言があったために、少なからぬ会員の皆様には「分子生物学会では男女共同参画に関して後退するのではないか」というご心配をおかけしました。これはまったく私の不徳のいたすところでしたが、その趣旨は、男女共同参画という問題を若手問題も含めたより広い視点から捉えて、男女ともに共同して働きやすい・生活しやすい社会を推進したいということにありました。

分子生物学会における男女共同参画は、2001 年の年会保育室設置 WG に始まります。翌年、初めての年会保育室設置と共に男女共同参画 WG（大坪久子座長）がスタートし、2006 年には委員会へと昇格して、私は初代委員長を務めさせて頂きました。2009 年には、第 2 回学協会連絡会大規模アンケート回答者の中から本学会会員のデータをもとにした分析を行い、「第 2 回バイオ系専門職における男女共同参画実態の大規模調査の分析結果」として本会 HP 上に公表しています（http://www.mbsj.jp/gender_eq/doc/enq2007_mbsj_rep.pdf）。松尾勲 WG 座長を中心になされたこの分析の結果、ポスドク等のキャリアパスや意識改革などの男女ともに共通した問題が浮かび上がっておりました。ちょうど今年は昨年末に実施された第 3 回学協会連絡会大規模アンケートの分析を行うタイミングでもあり、その結果を科学人材育成施策に繋げることができればと思っております。ちなみに、分子生物学会では 2448 名（会員に対する回答率 16.1%）からの回答を頂きました。会員皆様のご協力に心から感謝致します。第 18 期は、執行部や各種委員会の委員長や構成メンバーにも多くの女性会員に参画して頂いておりますが（HP をご覧ください）、今後も女性の visibility 向上やリーダー育成に努める所存です。

もう一つの大きな問題は、論文不正に関することです。この件に関して、福岡年会では前日に行われました理事会においても議論しました上で、初日の夕方に「緊急フォーラム」を開催し、これまでの学会の対応等についての経緯を説明しました。学会としてのアクションは、17 期（小原雄治理事長）において、11 月 8 日に、東京大学総長宛で調査結果の早期公開を求める文書を送り（HP に掲載済み）、その後さらに追加の要望や関係機関への要望書を送付しております。

本学会において、論文不正の問題は過去にも取り上げた例があり、研究倫理委員会が設置される契機となりました（http://www.mbsj.jp/admins/committee/ethics/index.html）。この度は、学会主催による若手教育シンポジウム等の中心としても活動された方が、論文不正に関与する形で辞職されました。この事実は、大変に重いものと承知しております。一方で、学会は、論文不正の実態を調査するための資料や権限を持ちあわせていないことをご理解頂きたいと考えます。

日本分子生物学会は、生命科学分野を包括する最大規模の学術団体ですので、今後も同様の科学不正が生じないためには何をすべきか、研究倫理への啓発も含め、改めてその対応について真摯に取り組みます。科学者を取り巻く競争環境が厳しくなった中で、論文不正は研究室を構成するすべての方々に関わる問題であり、中でも PI のラボ運営における研究倫理規範が問われているといえるでしょう。私たちは科学に対する愛と誇りと誠実さをけっして忘れてはならないと思います。

今期の学会運営につきましては、季節毎に理事長からのこのようなお手紙でもお伝えするとともに、公開情報はすみやかにHPに掲載致します。また、運用方針が整い次第、FacebookなどのSNSツールも活用し、一斉メール配信でのご連絡は可能な限り少なくする方針です。もちろんメールやSNS上での会員からのフィードバックも期待しています。

皆様にとって、今年が実り多く幸せな年となりますことを心からお祈りしています。

2013年1月

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第18期理事長
（東北大学大学院医学系研究科）
大隅　典子

第 18 期役員・幹事・各委員会名簿

理事長　（任期：2013 年 1 月 1 日～ 2014 年 12 月 31 日）

大隅　典子（東北大・医）

副理事長

小原　雄治（遺伝研）
中山　敬一（九大・生医研）

理　事

阿形　清和（京大・理）
五十嵐和彦（東北大・医）
一條　秀憲（東大・薬）
上村　　匡（京大・生命）
岡田　清孝（基生研）
近藤　　滋（阪大・生命機能）
佐々木裕之（九大・生医研）
篠原　　彰（阪大・蛋白研）
高橋　淑子（京大・理）
月田早智子（阪大・生命機能）
西田　栄介（京大・生命）
町田　泰則（名大・理）
山本　正幸（かずさ DNA 研究所）
渡邊　嘉典（東大・分生研）
荒木　弘之（遺伝研）
石川　冬木（京大・生命）
上田　泰己（理研・CDB）
大隅　良典（東工大・フロンティア研究機構）
後藤由季子（東大・分生研）
相賀裕美子（遺伝研）
塩見美喜子（東大・理）
島本　　功（奈良先端大・バイオ）
田中　啓二（都医学研）
長田　重一（京大・医）
花岡　文雄（学習院大・理）
三浦　正幸（東大・薬）
山本　雅之（東北大・医）

監　事　郷　　通子（情報・システム研究機構）、永田　恭介（筑波大・人間総合科学）

幹　事

庶務幹事　石野　史敏（東医歯大・難治研）、本間美和子（福島県立医大・医）
会計幹事　後藤由季子（東大・分生研）
編集幹事　上村　　匡（京大・生命）
広報幹事　荒木　弘之（遺伝研）、金井　正美（東医歯大・実験動物センター）
集会幹事　武田　洋幸（東大・理 / 第 36 回年会）、（第 37 回年会組織委員会より 1 名）

第 18 期執行部　大隅理事長、石野庶務幹事、本間庶務幹事、
荒木広報幹事、金井広報幹事、小原副理事長（オブザーバ）

Genes to Cells 編集長　柳田充弘（沖縄科学技術大学院大学）
賞推薦委員会　一條秀憲（委員長）、五十嵐和彦、相賀裕美子、長田重一、花岡文雄
研究助成選考委員会　月田早智子（委員長）、大隅良典、佐々木裕之、高橋淑子、町田泰則
国際会議支援・選考委員会　西田栄介（委員長）、上田泰己、岡田清孝、島本　功、三浦正幸
キャリアパス委員会　塩見美喜子（委員長）、石井　優、井関祥子、岩崎　渉、小野弥子、五島剛太、
小林武彦、斎藤通紀、佐藤　健、白髭克彦、東山哲也、柳田素子
研究倫理委員会　小原雄治（委員長）、岡田清孝、塩見美喜子、篠原　彰、町田泰則
生命科学教育　篠原　彰（担当理事）
生命倫理懇談会　〈検討中〉
「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」基金運営委員会（任期：2010 年 10 月 1 日～ 2014 年 12 月 31 日）
山本正幸（委員長）、阿形清和、岡田清孝、近藤　滋、塩見美喜子、嶋本伸雄、
谷口維紹、大隅典子（職指定委員）

高等学校との連携による社会貢献活動について（高校などへの講師派遣事業）

本学会では将来計画検討委員会などの答申を経て、社会貢献活動を積極的に行うことをこの数年議論してきました。特に、平成24年度より高校で扱う生物の教科書が段階的に改訂され、多くの教科書が分子生物学を中心に扱うようになったことへの対応を重視しました。実際に、高校などからは分子生物学に関する正しく、新しい情報を教えて欲しいと言う要望も多いと聞いています。分子生物学が、幅広い生物学の領域をカバーする基盤科学として、ライフサイエンス分野を発展させる役割を担っている、他の理系科目とは異なる側面もひとつの理由と言えるかもしれません。

このような現状をふまえ、高校や中学の授業あるいは教師の集まりに学会から講師を積極的に派遣するという事業を開始しました。これには、全国津々浦々に講師を効率よく派遣できるシステムの構築が必要となるため、派遣可能な地域や専門分野などを搭載した人材バンク（データベース）の整備を目指し、会員の中から無償で講師になる方を募りました（平成24年11月13日メール配信）。その結果、平成25年1月21日現在、161名という多くの方から講師登録の希望がありました。この場をお借りし、まずは皆様に御礼を申し上げます。

また一方で、派遣先の学校側にもこのような事業を周知するため、日本生物教育学会と日本生物教育会のホームページに記事を掲載しました。今後は、学校側への事業の普及活動と講師とのマッチングシステムの構築を計画しています。

この事業を軌道に乗せ、より多くの学校へ会員の方が出前講義などに出向き、若い方々が分子生物学をはじめとするライフサイエンスへの興味をより生み出すためにも、会員の皆様の講師登録など、本事業へ協力のほどよろしくお願いします。

第18期理事（生命科学教育担当）篠原　彰

分子生物学会による、国際会議支援システム（参加登録～演題受付～カード決済／ Web 運用）利用のご案内

分子生物学会では、日本発の国際会議を学会が支援するために経済的支援を行うことに加え、国際会議を開催する研究者の事務的な負担を減らすため、支援システム（JTB 西日本による国際会議トータル支援システム／Web 運用）をご用意しております。国際会議支援の詳細は同公募要項の中に書かれているとおりですが、同支援事業の応募とは別に、システムのみを使用されたいとの希望者につきましては、分子生物学会の会員であれば同額での利用が可能です。

システムのみを使用されたい場合は、学会事務局（分子生物学会 国際会議支援システム・システム利用係り E-mail：info@mbsj.jp）まで E-mail にて、開催概要と連絡先を明記のうえ、お申込みください。（一旦、学会を経由してから、JTB 西日本の担当者をご紹介します）

《支援システムの概要》

本学会が JTB 西日本と長期契約を交わしたことにより、JTB 西日本による国際会議トータル支援システムを通常より割安価格で利用できます。

①基本システム代金：23万円（事前参加登録受付・演題投稿受付・クレジットカード決済等の基本システム設定）
②オプション／メイン HP 代金:25万円（全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ケ月・更新メンテナンス12ケ月）
③オプション／オンライン査読システム：8万円
④オプションその他、が利用できます。（メニュー詳細については、一旦、学会を経由した後、JTB 西日本の担当者が説明いたします）

なお、この支援のみを受ける場合も、分子生物学会の支援（システム利用）を受けたことを当該会議の HP、要旨集などに明記いただきます。

第 36 回（2013 年）日本分子生物学会年会　開催のお知らせ（その 1）

第 36 回年会は嵐を呼ぶぜ！

会　　期：2013 年 12 月 3 日㈫～ 6 日㈮（4 日間）
会　　場：神戸ポートアイライド（神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場）
年　会　長：近藤 滋（大阪大学大学院生命機能研究科）
演題登録期間：2013 年 8 月 1 日㈭～ 8 月 26 日㈪予定
事前参加登録期間：2013 年 8 月 1 日㈭～ 10 月 31 日㈭予定
＊サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性もあります。
年会事務局連絡先：第 36 回日本分子生物学会年会事務局（㈱エー・イー企画 内）
〒 101-0003　東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 岩波書店一ツ橋別館 4 階
Tel：03-3230-2744　Fax：03-3230-2479　E-mail：mbsj2013@aeplan.co.jp
年会ホームページ：http://www.aeplan.co.jp/mbsj2013/

【年会のコンセプト】

昨年の 35 回年会のテーマは「IT を使って学会の新しいかたちを模索する」でした。IT 化が可能にした双方向でリアルタイムの情報交換のおかげで、個人間のコミュニケーションが可能になり、学会に参加した意義を感じられた参加者が多かったと思います。第 36 回年会でも、当然その部分は踏襲しますが、更に一歩進めたいと考えます。ネットの双方向性・リアルタイム性を年会の企画段階から活用し、情報の公開と会員からのフィードバックを盛り込むことで、全員参加で学会の新しい価値を創造することを目指します。

分子生物学会は、現在はほぼ全ての分野を包含する大きな学会になっています。もちろん、学会の存在意義の第一は、アカデミックな情報発信の場であることには変わりありません。しかし、全ての分野の研究者が集う貴重な場であるからには、それ以外の「使い道」もたくさんあるはずです。分子生物学会にどのような未知の可能性が、ニーズがあるのか？　世代や立場によって出てくるアイデアは違うはずです。皆さんの斬新な発想を借りて、今までにない年会を作り上げたいと希望します。

年会ホームページ公開以前から、既に、年会長の近藤のホームページ上で企画案の公開等を行い、それらに対するご意見も多数戴いています。また、twitter での意見交換から立ちあがった企画既に複数存在します。それぞれの企画は、まだ準備段階であり完成させるには皆さんの御協力が是非とも必要です。現在挙がっている企画に関しては、学会のコンセプトのページをご覧ください。また、全く新しい企画の提案も受け付けています。ご意見、ご提案は、メール（事務局宛あるいは近藤へ）か、あるいは #mbsj2013 のハッシュタグで twitter で呟いて戴ければ、こちらからコンタクトいたします。

【年会組織】

〈組織委員会〉

組織委員長	武田　洋幸（東京大学）
組織委員	荒川　和晴（慶應義塾大学）
	入江　直樹（理化学研究所）
	加藤　和人（大阪大学）
	杉本亜砂子（東北大学）
	塚原　克平（エーザイ）
	中川　真一（理化学研究所）

〈プログラム委員会〉

プログラム委員長	門脇　　孝（東京大学）
プログラム副委員長	塩見　春彦（慶應義塾大学）
プログラム委員	一條　秀憲（東京大学）
	後藤由季子（東京大学）
	小安　重夫（慶應義塾大学）
	夏目　　徹（産業技術総合研究所）
	三浦　正幸（東京大学）
	水島　　昇（東京大学）
プログラム庶務幹事	笹子　敬洋（東京大学）
	脇　　裕典（東京大学）

【学術プログラム】

◆シンポジウム（全 13 テーマ）

本年会のシンポジウムは、すべてプログラム委員会が企画します。また、本年会の目玉の一つとして、各プログラム委員は自分の名前を冠したシンポジウムを開催します。基本的に年会コンセプトに沿った企画ではありますが、どのように工夫し斬新なシンポジウムにするかは、各委員に委ねられています。これまでの年会シンポジウム以上に“本気度の高い”シンポジウムを是非ご期待ください。

1．夏目　徹　企画　計測からモデリングバイオロジーへ
Quantitative proteomics: from measurement to modeling biology
オーガナイザー：夏目 徹（産業技術総合研究所）

質量分析システムの進歩から、タンパク質解析の感度とダンナミックレンジが、近年飛躍的に向上した。またナノテク・ロボットによるサンプル前処理と導入が高度化し、高い再現性も得られるようになってきた。その結果、1 細胞中の僅か 10 分子のタンパク質の絶対定量すら可能となった。この計測情報に、各種オミックス（トランスクリプトーム、メタボローム）を統合、あるいは相互参照する事により、これまで、消去法あるいはセレディピックな方法に頼っていた、生命システムのモデリングのプロセスを体系化且つ検証することが可能ではないだろうか。本シンポジウムでは、定量計測から展開する、新時代のライフサイエンスについて、理論生物学者、計測研究者が一同に介して議論したい。

2．塩見 春彦　企画　転移因子：ゲノム進化の推進者
Transposable elements as dynamic reservoirs for new cellular functions
オーガナイザー：塩見 春彦（慶應義塾大学）

ヒトゲノムの実に 50％以上が転移因子（特にレトロトランスポゾン）とその残骸で占められている。しかし、なぜ、これほどまでに転移因子がゲノム中に増殖したのか？　なぜ、宿主は彼らの増殖を許しているのか？　少なくとも、転移因子が増殖した結果、ゲノム中に冗長な配列が増え、ゲノムサイズの増大と冗長な配列の“適応”―宿主にとって新しい遺伝子と遺伝子発現制御配列の選択―が起こった。つまり、転移因子とその残骸は宿主ゲノムに様々な変化を生み出し、進化の過程でその変化の中からたまたま宿主の生存に都合の良いものが宿主ゲノム情報発現制御機構に組み込まれてきた。これは、我々のゲノムは転移因子という自然の変異源を内包している、といえる。このシンポジウムでは、転移因子がゲノムに様々な（次世代に伝わる、そして遺伝浮動と選択の対象となる）変化を引き起こすことでゲノム進化を駆動してきたという可能性を、転移因子研究の歴史から最新の解析技術を用いたゲノム解析までを俯瞰し、議論する。

3．一條 秀憲　企画　シグナル伝達温故知新～発見者に聴く～
Signal Transduction, learning from the discovery
オーガナイザー：一條 秀憲（東京大学）

細胞内シグナル伝達研究における 1980 ～ 1990 年代を中心とする日本人研究者の輝かしい功績は、その後の日本の生命科学研究発展の大きな礎となった。このシンポジウムでは、様々なシグナル伝達系においてそれぞれパイオニアとして大きな発見をし、且つ現在も生化学・分子生物学分野の最先端で活躍されている研究者に、遺伝子クローニングや分子機能解析における世界的競争の中での「世紀の発見の経緯と真相」を中心に話して頂く。またそれがどのようにして現在の最新の研究に繋がっているのか、最先端の研究成果についても触れながらご紹介頂く。

4．水島　昇　企画　個体レベルのオルガネラバイオロジー
Organelle biology in whole organisms
オーガナイザー：水島 昇（東京大学）

オルガネラ（細胞内小器官）は細胞内でそれぞれ独自の機能を果たしており、それらの基本機能は酵母などのモデル生物や培養細胞の研究を中心にして明らかにされてきた。しかし、多細胞生物においては各オルガネラの役割は細胞や組織によってしばしば異なり、培養細胞の研究からは予期しない機能を発揮している場合がある。このシンポジウムでは、オルガネラバイオロジーを個体レベルで推進している研究者によって、細胞内オルガネラの多細胞生物での機能を議論する。

5．武田 洋幸　企画　脊椎動物のからだをつくるメカニズム：クロマチンレベルの制御から器官形成まで
Building the vertebrate body: from chromatin to organs
オーガナイザー：武田 洋幸（東京大学）

ゲノム、遺伝子、タンパク質などの大量の情報がもたらされ、発生生物学は新しい段階へ入っている。実際エピジェネティックスの研究は、発生生物学で長い間謎とされてきた現象、即ち発生中の細胞がたどってきた歴史を記憶することやその次世代への継承、のメカニズムを明らかにできると期待されている。一方、細胞集団によるパターン形成や器官形成のメカニズムは依然として謎が多く、毎年重要な発見が報告されてい続けている。このシンポジウムでは、脊椎動物をモデルとしてクロマチンレベルの遺伝子制御から器官をつくる原理までを対象に、講演者に最新の成果を提供してもらい、新しい発生生物学の方向を議論する。

6．後藤由季子　企画　幹細胞生物学のフロンティア
New concepts arising in stem cell biology
オーガナイザー：後藤 由季子（東京大学）

幹細胞は、細胞の運命制御を研究する上で非常に魅力的な研究対象であり、その研究を通して多くの新しい分子メカニズムが発見され、生物を理解する上で重要な新たな概念が提唱されてきている。 本シンポジウムは、幹細胞研究のフロンティアを切り拓いている研究者に最も新しい知見を語っていただき、今後の方向性について議論していただく場としたい。

7．門脇　孝　企画　あるべき橋渡し研究を語り合う
Forum for bench-to-bed science: the direction of the road ahead
オーガナイザー：門脇 孝（東京大学）

生命科学の基礎研究においては、その成果が臨床応用につながる可能性を謳うことで、意義が強調されることが多い。しかしながら、実際に基礎的な知見を踏まえて開発されたバイオマーカーや治療薬は、ごくごく少数にとどまるのが現状である。本シンポジウムでは、臨床応用へと既に至った、或いはそれが近い将来に大いに期待される橋渡し研究の実例を、幅広い疾患に渡って扱う。このような研究においては、まず優れた基礎研究が基盤となり、その上で標的分子の選択が適切になされ、かつ種々の分子生物学的な手法が駆使されてきた。また同時に、大学、研究所、そして企業間の連携も大きな役割を果たしている。今後このような橋渡し研究を進め、発展させていくにあたり、どのような可能性が拡がっていて、どのような課題があるか。それを幅広い立場から論じたい。

8．小安 重夫　企画　高次機能相互作用の理解へ向けて
Toward the understanding of high-order complex functional networks
オーガナイザー：小安 重夫（慶應義塾大学）

これまでの分子生物学的研究手法の発展は、生命現象の分子的基盤の解明に大きく貢献し、多くの成果を世に送り出してきた。その間の主たる研究戦略は要素還元型の研究であり、臓器から細胞へそして細胞内の分子へと掘り下げてゆく手法が中心であった。一方、生命活動は細胞が作り出す器官や臓器、さらにそれが連関しあう個体において営まれている。個体における生命活動の営みを理解するためには高次機能の理解が必要であるが、それは必ずしも細胞単位の研究のみでは難しい。個体における臓器間の相互作用、高次機能による臓器機能の制御といった面に着目し、生物の種々の要素的な構造／機能を時空間横断的な相互作用ネットワークとして捉えることが必要であろう。本シンポジウムでは、このような研究の遂行に分子生物学がどのように貢献できるかを議論したい。

9．三浦 正幸　企画　分子イメージングと光操作による動的細胞内分子解剖
Dynamic cell anatomy by molecular imaging and photo manipulation
オーガナイザー：三浦 正幸（東京大学）

細胞シグナル伝達や化学反応産物を検出するための蛍光タンパク質、化合物の開発が急激な進展を見せるとともに、シグナルの検出技術、生体サンプルの処理に関してもユニークな研究が行われている。さらに光によって時空間的に高い解像度をもって分子機能を操作し、生命現象を理解する研究が、細胞レベルのみならず、個体レベルでも展開されてきた。本シンポジウムでは分子イメージング、光を用いた分子機能操作による生命機能探索への新たな切り口を議論する。

10. 分子の言葉で脳機能を語る－新しい分子生物学的アプローチ

Deciphering molecular mechanisms underlying brain functions using new tools and approaches

オーガナイザー：柚崎 通介（慶應義塾大学）ほか

近年、神経回路の分子生物学的な研究の進展は目覚ましい。特に ニューロン活動の計測・光操作やシナプスを介した接続の可視化 等、新たな手法の開発に伴って最近急速に研究が展開している。本シンポジウムでは、神経回路 / シナプス形成のメカニズム・原理の理解を目指し、精力的に仕事をされているフロントランナーの方々に最も新しい話題を提供していただく。

11. 大規模生物学のインパクト：FANTOM と ENCODE

Impact of Large Scale Biology: FANTOM and ENCODE

オーガナイザー：鈴木 治和（理化学研究所） / Piero Carninci（理化学研究所）

核酸配列シーケンスは当初、遺伝子やゲノムの一次構造を決定するために使われてきたが、今や次世代シーケンスは生物学研究における我々のアプローチ法に革命を与えており、生物学情報をゲノムワイドに収集するために極めて有用な手段となっている。FANTOM プロジェクトや ENCODE プロジェクトでは、遺伝子活性やその制御を網羅的に理解するために必要な巨大なデータセットを取集し解析している。これらのプロジェクトのリーダーが最近のデータや解析結果と、この分野の将来の発展について紹介する。

12. がん幹細胞研究に基づく新たながん治療戦略

Novel therapeutic approaches for cancer based on cancer stem cell research

オーガナイザー：赤司 浩一（九州大学） / 佐谷 秀行（慶應義塾大学）

がん組織にも、自己複製と分化過程の細胞を供給する役割を果たす組織幹細胞様のがん細胞が存在することが明らかになり、これを「がん幹細胞」と呼ぶようになった。がん幹細胞は多くの性質の異なるがん細胞を生みだすことから、がん組織の不均一性を構築する原因となるばかりでなく、増殖速度が遅いことや、様々なストレスに対して耐性が高いことなどの理由から、治療に対して抵抗性の高い細胞であることが分かってきた。そのためがんの根治を目指すためには、がん幹細胞の性質を理解し、その性質を打破できる戦略を考案する必要がある。本シンポジウムでは、がん幹細胞研究で第一線を走る国内外の研究者によって、新たに見えてきたがん幹細胞の性質、その分子背景、そして治療戦略についてお話しいただく。

13. 免疫記憶

Immunological memory

オーガナイザー：黒崎 知博（大阪大学） / 中山 俊憲（千葉大学）

「一度かかった感染症には二度とはかからない」という、「免疫記憶」の重要性は十分認識されてきている。例えば、インフルエンザワクチンはこの「免疫記憶」を用いた典型的な予防治療法であり、最近では、感染症のみならず、癌に対する治療ワクチンの開発も積極的に試みられている。しかしながら、免疫記憶の成立・維持・再活性化に関わる基礎的メカニズムの研究、又、その知見に基づいて、有用な免疫記憶のみ増強する制御法の開発は、やっと始まったばかりである。本シンポジウムにおいては、免疫記憶の研究で第一線を走っている研究者らに、最新の データ、及び概念を語っていただく。

◆ワークショップ（約 90 テーマ）

会員より企画を公募します。応募要領の詳細は、後述の【ワークショップ企画公募について】をご参照ください（締切：3 月 25 日(月)）。

【年会企画】

◆海外ポスドク呼び寄せ

海外在住の日本人若手研究者 200 名にそれぞれ 10 万円の旅費を支給し、年会での発表の機会と、人材を求める研究機関、ベンチャー企業と話し合う機会を提供します。

応募条件その他の詳細は、年会ホームページ上にて後日公開いたしますので、見落とさないようお願いします。年

会に参加して頂ければ、現在分子生物学会の会員かどうかは問いません。海外 PD や留学を検討している大学院生に、日本の研究者社会は彼らを見捨てていないことを実感してもらえればと考えます。

◆薬品ベンチャー主催シンポジウム

アメリカでは、多くの若手研究者の夢はベンチャーを作って億万長者になることです。それが良いのかどうかはともかく、夢とやる気を与えていることは間違いありません。一方、日本にはそのような雰囲気はありません。何が違うのか？　日本のベンチャーの将来性は？　それを「知らない」のではそもそも考えることができません。実は、今回の組織委員会には薬品ベンチャー関係者が入っています。彼にベンチャー企業のトップを集めてもらい、それぞれの企業が持つ夢や可能性、現状を語ってもらいます。その後、個別の話し合いをする時間・スペースも用意しますので、特に海外 PD の人等は、自分の将来の姿を模索する良い機会になると思います。

◆生命科学研究を考えるガチ議論

日本の研究環境が様々な深刻な問題を抱えていることは事実です。若手の就職問題や、捏造、研究費の分配、雑務による実質研究時間の低下など、問題は山積しています。これらの諸問題について、我々のほとんどは、「お上のすることだから」と考え、愚痴を言うにとどまっています。しかし、日本の科学研究環境を向上させたい、と考えているのは、文科省の担当官たちも同じなのです。研究者サイドが自分のニーズに合った、有効で実現可能な改革案を作れば、実現の可能性は大いにあります。36 回年会では、一般研究者（学術審議会に出るような大物以外という意味）が直接に文科省その他の funding agency と、本音で対話できる機会を作ろうと考えています。もちろん、ただ、年会当日に集まって話すだけでは、議論も深まるとは思えず、有用なアウトプットも得られません。そこで、まず議論用のホームページを設置し、そこで、あらかじめ十分に意見交換を行い、そこでおこなわれた議論や改革案を前提に、年会の当日に直接対決してもらおう、というわけです。議論用ホームページは、3 月頃に運用を始める予定です。年会当日の直接対決には、国会議員、大臣の参加もあるかもしれません。

◆ TED のような企画

エンターテイメント性を追求したプレゼンを通じて、生命科学の明日に影響を及ぼし得る「アイデア」に触れる極上の 18 分間。斬新で「聞く価値のあるアイデア (wisdom worth spreading)」のプレゼンテーションショーを開催します。本企画は市民公開講座として、一般の方々にも公開する予定です。

◆学会と JAZZ の融合

分子生物学会には、実は楽器を演奏される会員が少なからずいらっしゃること、ご存知でしたか。年会が開催される神戸はジャズの街。会員により構成されたジャズバンドが、ミキサー時のポスター会場や休憩スペースを音楽で満たします。バンドメンバー募集に関する詳細は、追って年会ホームページにて公開いたします。

◆ここだけ 2050 年シンポジウム

40 年後の分子生物学を SF 的に捉えることで、生命科学研究と社会との関わりを考える機会となるような企画です。出演者の公募等をする可能性がありますので、ホームページをご注意下さい。

◆アート企画「ザ・分子生物学会」

無味乾燥というわけではないですが、たいていの学会は地味な研究発表の場です。ですが、そこにアートがあってもいいじゃありませんか。美意識とサイエンスの感覚は、実は相乗効果を持つかも、いや、きっとそうに違いありません。学会をアートで彩る。ちょっと楽しくなってきませんか？具体的に何をするのかは、鋭意構想中です。何か良いアイデアがありましたら、是非、ご連絡ください。

【ワークショップ企画公募について（3 月 25 日㈪受付締切）】

年会では、ワークショップの企画を会員の皆さまより公募いたします。特に、先頁にてご紹介した決定済みのシンポジウムとは重複しないテーマについての魅力的な提案をお待ちしております。ご提出いただいた企画案は、プログラム委員会において厳正なる審査を行い、採否を決定します。採否結果は 4 月中旬頃に応募者へご連絡いたします。下記要

項をご確認のうえ、奮ってご応募ください。

◆募集要項

・企画提案いただくオーガナイザーは、両名とも日本分子生物学会の会員に限ります。
・1テーマあたり150分の時間枠で、約90テーマを採択します。
・海外演者の招聘にあたり、年会からの旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、海外在住ポスドクを招聘する場合は、お一人につき10万円の旅費補助を支給します。また、海外招聘演者の参加費は免除とさせていただきます。
・国内演者についても、旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、非会員演者の参加費は免除とさせていただきます。
・講演言語はオーガナイザーに一任いたします。ただし発表スライドは全演者に英語での作成をお願いします。
・8月末の演題投稿後に予定されるプログラム編成スケジュールが大変タイトなため、提出物等の締切厳守を予めご了承いただきます。

◆応募要領

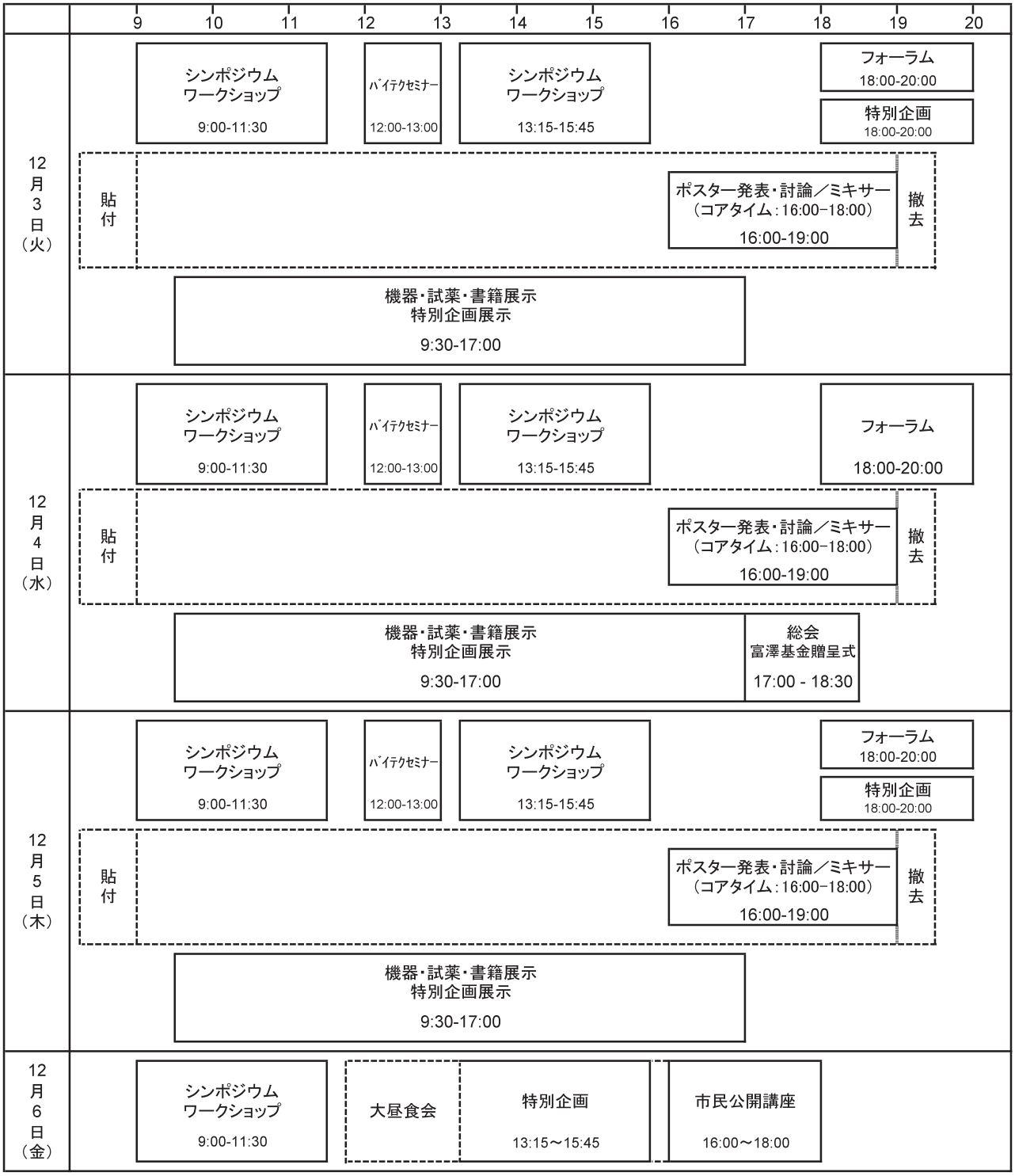
下記事項をご明記のうえ、3月25日㈪までに年会事務局宛、E-mail（mbsj2013@aeplan.co.jp）にてご提出ください。

1）テーマタイトル（和文・英文）
2）2名のオーガナイザーの氏名・所属（和文・英文）
3）200字程度の概要（200字程度）
4）予定演者の氏名・所属（応募時での演者による講演承諾は不要です）
5）連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
6）該当する分野（A～Gのいずれかを選んでください）
A．分子構造・生命情報
B．分子・複合体の機能
C．細胞の構造と機能
D．発生と再生および神経科学
E．疾患生物学
F．分子生物学的方法、技術
G．その他
7）予想される聴衆数

◆企画提出およびお問合せ先

第36回日本分子生物学会年会事務局（㈱エー・イー企画 内）
〒101−0051　東京都千代田区一ツ橋2−4−4岩波書店一ツ橋別館4階
Tel：03−3230−2744　　Fax：03−3230−2479　　E-mail：mbsj2013@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】



※あくまで 2013 年 1 月時点での予定であり、今後変更される場合があります。

第35回日本分子生物学会年会（福岡）の報告

第35回の分子生物学会年会が、昨年の12月11日㈫から14日㈮にかけて福岡で行われました。今年の年会は、邦題としては「～年会の新しいスタイルを摸索する～」、英文タイトルとしては“Trial of IT-technology-based member-member communication at the annual meeting”とし、IT化、そして全員が口頭発表することによる参加者同士のコミュニケーション促進を試みました。参加者総数は6,600名で7,000名を割りましたが、総演題数としては3,960にのぼり、実際に会場にいた人数としては、例年以上の賑わいをみせていました。特に、初日のオープニングシンポジウムは、ノーベル賞授賞式の日に山中伸弥会員のビデオトークがあったこともあり、1,000名収容の会場がほぼ満席となる盛況ぶりでした。

分子生物学会は中央主導ではなく、組織委員会のオリジナリティを重視した年会運営をすることで、常に新しい試みをしながら発展してきた学会です。今回も、生化学会との合同でパターン化することなく、分離連続開催によって、より独自性を出す形で開催しました。その上で、学生がそれぞれの学会に相互乗り入れできるようにし、若い世代に将来の年会のあり方を考える機会を提供しました。

年会の柱となるシンポジウムについては、分子生物学会らしさが出るように、ゲノムやエピジェネティクスなどをキーワードとし、フロント・サイエンスが異分野の若手研究者にも楽しめるよう工夫しました。そして、シンポジウムと並行して公募でつくられたワークショップを100ほど設定しました。年会としては、whole genome, personal genome元年として位置づけられたと思います。

ポスター発表だけに埋没しないように、関連ワークショップで口頭発表するか、ショートトークで発表する機会を発表者全員に提供しました。しかし、初めて試みたショートトークは、会場のロケーションの問題や、プログラムの案内不足などがあり、集客の観点からすると反省の方が目立つ企画となりました。初めてのこともあり、ショートトーク用の特設会場設営と、発表用pdfの収集に多くのエネルギーを使い、余力が尽きた感ありでした。

ショートトークを除くと、全般的に新しい試みに好評を頂きました。特に、IT化委員会を中心に企画されたIT化は分子生物学会らしく斬新なものとなり、年会の3日目には一日に4,058台（Unique）がWiFiに接続し、繁期には1,927人が同時アクセスするという画期的な記録を作りました（WiFiだけのデータなので、3Gとかを含むともっと多くの参加者がアクセスしていたことになります）。美しく見やすいpdf要旨は、従来の要旨集の概念を吹き飛ばすものとなり、要旨集の作成と配布にかかる莫大な費用の大幅削減へ道を開いたと言えると思います。また、やがて到来する巨大データベースに直接アクセスしながら発表する時代へのレールを敷いた年会となりました。本年会を契機に、whole genomeデータベースへ直接アクセスしながらプレゼンや質疑応答をする双方向のプレゼンに質的転換されていくものと思います。

高校生の口頭発表とポスター発表、それに続く市民公開講座も人気が高く、冬の開催とは思えない熱気に包まれたものとなりました。高校生の発表のレベルも高く、blastサーチやqPCRとかがプレゼンの中にごく当たり前のように出てきたことには多くの参加者が驚かされました。ご講演頂いた中村桂子先生と藤木生化学会大会長と、ご協力頂いた福岡の高校の先生方にはこの場を借りてお礼申し上げます。その他として、予想以上の賑わいをみせたのが、企業説明会・リクルートブースとラーメンなどの屋台でした。特に博多というロケーションだったことでラーメンはすぐに完売となっていました。ランチョンセミナーに入れなかった参加者も博多の味を楽しんでいたようで何よりでした。

今回の経験をもって、横浜と神戸しか開催のチョイスがなかった昨今の状況に、福岡で開催するという新たな選択肢が増えたのではないかと思います。今後とも、年会を担当する組織委員の個性を発揮することで、常に新しい刺激のある年会が開催されることを期待します。最後になりましたが、何の脈絡もない形で招集されながらも過酷な仕事をこなして下さいました組織委員各位（諸橋、篠原、見学、小安、巌佐会員）には心より御礼申し上げます。またIT化委員各位（加々美、坊農、辰巳、入江会員）、特にシステムの作り込みをして頂きました加々美会員と、古澤さんを中心に裏方を仕切ってくださったJCSさんに感謝申し上げます。また、多大な寄附を頂きました日本製薬団体連合会と福岡市に深謝申し上げます。福岡での新たな出会いが新しいサイエンスを産んでくれることを期待します。

2013月1月
第35回日本分子生物学会年会
年会長　阿形　清和

第 35 回年会・男女共同参画企画開催報告

タイトル：「全員参加の生命科学研究を目指して　（パートⅡ：生の声を聞こう！）」
日　　時：2012 年 12 月 11 日㈫ 11：40 ～ 13：00
会　　場：福岡サンパレス　パレスルーム A・B
企　　画：日本分子生物学会 男女共同参画委員会
委 員 長：後藤由季子（東京大学）
副委員長：塩見　春彦（慶應大学）
委　　員：井関　祥子（東京医科歯科大学）、大杉　美穂（東京大学）、佐藤　健（群馬大学）、篠原　美紀（大阪大学）、竹内　純（東京大学）、原　英二（がん研究所）、本間美和子（福島県立医科大学）

第 35 回年会の初日に男女共同参画企画「全員参加の生命科学研究を目指して」を開催した。2012 年は、分子生物学会が初めて男女共同参画企画を企画してから 11 年目となる。参加者は約 140 名で、会場で行ったアンケートではその 9 割から良かったという感想をいただいた。以下に年会企画の講演要旨、および会場アンケートの結果について報告する。なお、講演記録や発表資料、アンケート結果の詳しい内容は学会 HP に掲載した。是非ご覧いただきたい。

Ⅰ．企画概要

【第 1 部】講演「男女共同参画委員会企画にあたって」
後藤由季子（東京大学）

18 期より男女共同参画委員会が改編されるにあたり、過去 10 年以上にわたる委員会活動を振り返る内容となった。後半は、女性が活躍するためにはどのようなことが必要か？　という視点から講演が展開された。

【第 2 部】講演「意識改革の必要性について」
塩見　春彦（慶應大学）

今年の講演は、昨年の「科学的根拠のない無意識のバイアスを理性的に、かつ意識的に排除することによって、男女共同参画が進む」という講演内容を更に深めたものとなった。

講演では、1 部で取り上げられた年会発表者の属性調査結果（16 ページ参照）を例に、ランクが上っていくほど女性の数が急速に減っていくことが指摘され、次いでその原因と解決についての見解が述べられた。今回の講演の全文記録およびスライドは学会 HP に掲載している。大きな反響があった昨年の講演記録と併せてご覧いただきたい。

【第 3 部】テーブルディスカッション

第 1 部、2 部の講演後、参加者全員を 8 グループに分け、13 名のディスカッションリーダーを囲み、それぞれのテーマに沿ってディスカッションが行われた。これまでにない形式での企画だったが、どのグループも和やかな雰囲気の中、活発に意見を交わす様子が見られた。下記は、当日話し合ったテーマとご協力いただいたディスカッションリーダーの一覧である。また、この他、学会理事をはじめとする多数の PI の方が参加くださり、ご自身の経験談や若手を元気づけるようなコメント、励ましの言葉をいただいた。ディスカッションリーダーをはじめ企画に参加くださった皆さまに、この場を借りて深く感謝申しあげたい。

1．「ライフワークバランス（若手編）」：宮川さとみ氏（大阪大学）、春田奈美氏（東北大）
2．「ライフワークバランス（若手編）」：岡田由紀氏（東京大学）、上川内あづさ氏（名古屋大学）
3．「ライフワークバランス（若手編）」：倉永英里奈氏（理化学研究所）
4．「大学の取り組みの比較など」：相田美砂子氏（広島大学）、東山哲也氏（名古屋大学）
5．「キャリアパスなど」：本田圭子氏（（株）東京大学 TLO）、玉井馨子氏（第一三共（株））
6．「ライフワークバランス（シニア編）、女性 PI への道」：塩見美喜子氏（東京大学）

7.「フリートーク」: 近藤滋氏（大阪大学）
8.「意識改革」: 阿形清和氏（京都大学）、塩見春彦副委員長（慶應大学）

Ⅱ. アンケート集計結果

会場参加者には、用紙でのアンケートの協力も依頼した。集計結果、および記入いただいた自由記述欄の概要を下記に掲載する。

（アンケート回収枚数　81 枚）

【1】回答者の属性

・性別

1. 男性	40%
2. 女性	58%
3. 回答しない（無回答含む）	2%

・年齢

1. 20−24 歳	10%
2. 25−29 歳	16%
3. 30−34 歳	11%
4. 35−39 歳	16%
5. 40−44 歳	17%
6. 45−49 歳	15%
7. 50−54 歳	5%
8. 55−59 歳	5%
9. 60−64 歳	1%
10. 65−69 歳	4%

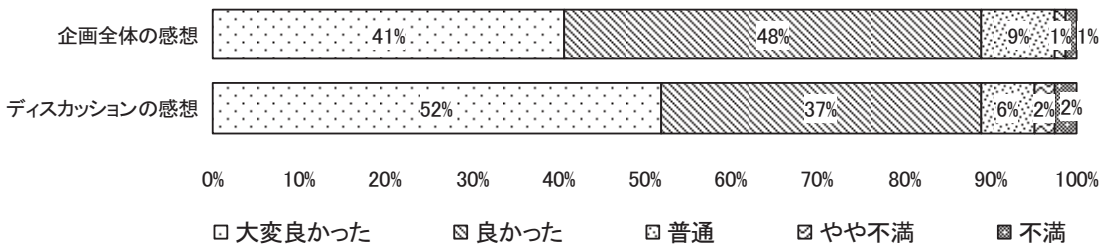
・所属

1. 大学	79%
2. 研究機関	11%
3. 企業	6%
4. その他	1%
5. 回答しない（無回答含む）	2%

・身分

1. 学部生	2%
2. 大学院生（修士）	10%
3. 大学院生（博士）	10%
4. 研究生	2%
5. ポスドク／研究員	15%
6. 助教	17%
7. 講師	7%
8. 准教授	6%
9. 教授	20%
10. 主任研究員／グループリーダー	1%
11. ユニット長／チームリーダー	2%
12. 役員クラス	2%
13. 主任クラス	1%
14. その他	2%

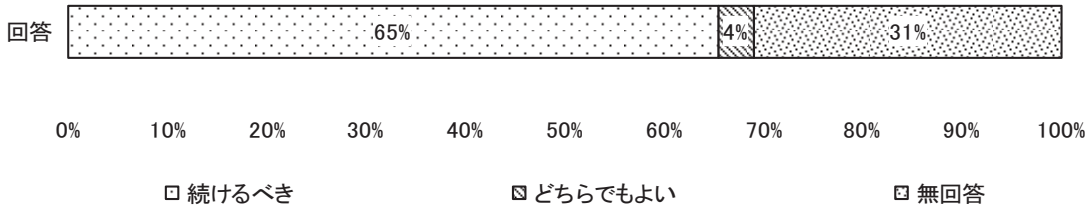
【2】今回の男女共同参画企画の感想をお教えください。



（アンケートおよび自由記述の概要）

企画全体、第 3 部ともに、良かったという感想がほぼ 9 割という大変好評の結果となった。特に第 3 部のディスカッションの評価が高く、様々な立場からの意見を聞くことが出来て勉強になった、もっとたくさんのことを聞きたかった、という意見が多く寄せられた。この企画は、学生や若手研究者の抱えている不安や疑問に対し、経験豊かなディスカッションリーダーや司会（男女共同参画委員）、PI クラスの参加者がアドバイスをする、また参加者同士が意見や考えを共有する、貴重な機会となったようであった。

【3】今後も年会において男女共同参画企画を行うべきだと思いますか。今後取り上げて欲しいテーマをお教えください。



（自由記述の概要）

意識改革、キャリアパスをテーマに取り上げて欲しいという意見や、ロールモデルとなる研究者との交流の場を希望する声が寄せられた。

【4】今後、男女共同参画委員会で行って欲しい事業やイベント等があればお教え下さい。

（自由記述の概要）

育児支援事業の紹介をしてほしい、また研究と育児を両立している方の話を聞きたいという声が目立った。また、海外の現状を知りたいという意見も複数寄せられている。

【5】その他、ご意見がありましたらご自由にお書きください。

（自由記述の概要）

参加者からは、キャリアパス、ライフワークバランス、少子化対策等、多岐にわたる問題へのご意見をいただいた。今後の企画に向けてのコメントとしては、悩みながら頑張っている女性を勇気づける企画を続けてほしいという声と共に、プログラムの周知を工夫し、より多くの方に男女共同参画企画に参加してもらいたい、という意見が寄せられた。

日本分子生物学会における男女共同参画への取組み
年会 属性調査（2012年）

属性調査とは：
日本分子生物学会男女共同参画委員会では、学会のシンポジウムでの発表者やオーガナイザーの女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないか？という疑問を持ち、2009年度から年会発表者の属する性（属性）を調査しています。

属性調査の目的：
大学や研究機関での男女共同参画を推進するためには、学術研究発表の場である学会において、優れた研究は性差に関係なくスピーカーやオーガナイザー等、目で見える形で発表の機会を与えられたり評価される仕組みを作ることが必要です。そこで年会における発表者の実態調査を毎年行い、学会員の属性ならびに発表カテゴリーごとの発表者属性について、基礎データを収集することが目的です。

属性調査の方法：
年会演題登録時に演題登録者が入力画面に従って、解答いただきました。
本年の年会については、一般演題：2,903題、ワークショップ：360題、シンポジウム：27題、の登録が行われました。
属性調査への回答：一般演題： 99.2 %、ワークショップ： 51.2 %、シンポジウム： 40.0%

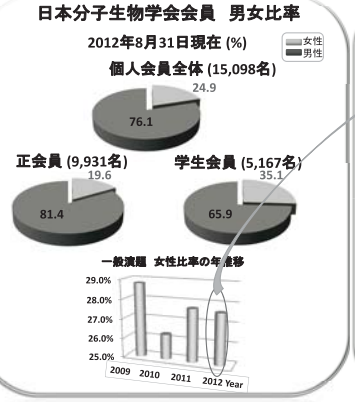
第35回日本分子生物学会年会（MBSJ 2012）開催概要

会期：2012年12月11日（火）-14日（金）
会場： 福岡国際会議場・マリンメッセ福岡 他
年会長：阿形清和（京大）
演題募集期間：2012年8月1日-31日

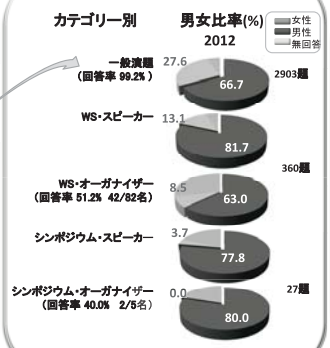
日本分子生物学会男女共同参画委員会
委員長 後藤由季子 副委員長 塩見 春彦

＊第3回大規模アンケートお知らせ
○実施期間：平成24年11月1日（木）～12月14日（金）
○アンケートURL：https://was2.5star.jp/survey/index/n3dd5zyv/4134/
今回のアンケートには、女性の社会進出や子育て、介護問題のみならず、特に、ポスドクや若手任期付き職の問題点を重点的に調査することも重要な目的としております。本アンケートは回答数の大きさ（前回は2万人規模）に意味があり、その結果が政府の基本政策にも反映されました。是非、おひとりでも多くの方のご回答をお願い申し上げます。

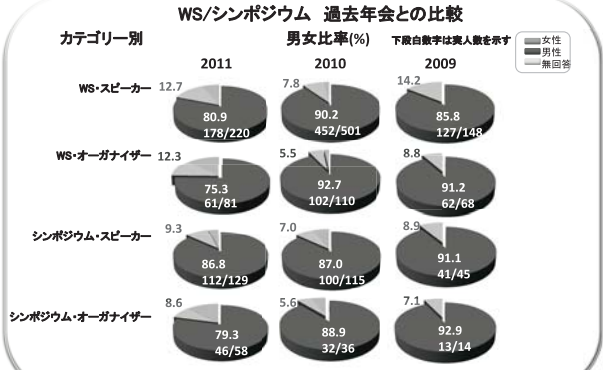
日本分子生物学会会員 男女比率



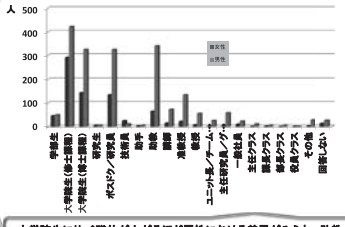
第35回日本分子生物学会年会



WS/シンポジウム 過去年会との比較



演題投稿者の職階比較（実数） 2012

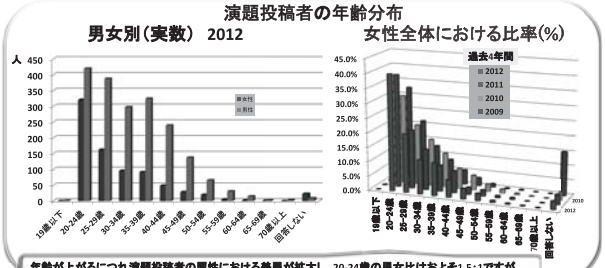


大学院生に比べ職位が上がるほど属性における差異がみられ、助教、准教授、教授における男女比は各々 5.5 :1、6 :1、7 :1となっています。

属性調査 まとめ

- 2009年の調査開始以来、一般演題発表者の女性比率は、26~29%の範囲で推移し、会員全体の比率と比べほぼ同等です。
- ワークショップ(WS)/シンポジウムのスピーカーとオーガナイザーについて、それぞれの過去データを区別して再集計し、経年変化を比較しました。
- 2012年はWS/シンポジウム、いずれも会員全体と比べ女性比率が低い状況ですが、回答率を上げ正確なデータを得ることも課題です。年推移も観察されることから、積極的呼びかけによる上昇が期待されます。

演題投稿者の年齢分布



年齢が上がるにつれ演題投稿者の属性における差異が拡大し、20-24歳の男女比はおよそ1.5:1ですが、25-29歳では2:1、30-34歳では3:1、35-39歳では4:1、40歳以上では5:1となっています。

男女共同参画に関する 日本分子生物学会のあゆみ

年度		活動内容	
2001		第24回年会保育室 設置ワーキンググループ（WG）	ライフイベントへの支援 年会参加者層のすそ野の拡大
2002	小川智子、大坪久子	日本分子生物学会男女共同参画WG	
		第25回分子生物学会年会 男女共同参画WS開催	
2003		学協会連絡会第1回大規模アンケート調査WG	非常勤職員の学術振興会研究費申請資格を可能に
2004		提言「研究助成への申請枠拡大」	
		提言「子育て支援型研究員制度」	
		公聴会「男女共同参画基本計画改訂作業への意見集約」	特別研究員RPD制度
2005		提言「ライフサイエンスにおける男女共同参画の推進」	
		調査報告「科学技術系学協会における女性比率」	
		提言「科学者・技術者人材のさらなる活用に向けた整備」	第3期科学技術基本計画に反映
		企画参加「第1回女子中高校生 夏の学校」	
		調査報告「学協会等における女性比率・活動の年次推移」	
		学協会連絡会 第4期幹事学会担当 （大隅委員長）	
2006	大隅委員長	男女共同参画WGは委員会へ昇格	
		調査報告「RPD制度に関するwebアンケート」	モデル事業の開始
		要望「女性研究者支援モデル育成事業 継続と予算拡大」	
2007		企画参加「第1回女子中高生 関西科学塾」	
		学協会連絡会第2回大規模アンケート調査WG	数値目標の設定
		調査報告ならびに要望の提出	
		特別研究員-RPD制度に関するwebアンケート	モデル事業 加速プログラム
		企画参加「第3回女子中高生 夏の学校」	
		要望「女性研究者採用と昇格に対する数値目標の設定」	
2008		企画参加「第2回女子中高生 関西科学塾」	
		報告書「学協会連絡会第2回大規模アンケート」	第4期科学技術基本計画に反映
		報告書「科学技術系専門職における男女共同参画実態大規模調査」	
		要望「女性研究者支援モデル育成事業の推進と拡充」	
		要望「第4期基本計画, 第3次共同参画基本計画へ意見集約」	数値目標の維持
2009	杉本委員長	報告書「バイオ系専門職における実態の大規模調査分析」	
		要望「科学技術分野での男女共同参画推進に向けて」	
		分子生物学会年会 女性比率調査第1回	属性実態調査開始
2010		分子生物学会年会 女性比率調査第2回	
		学協会連絡会WG 「学会におけるリーダーシップ活動」	課題の提示
2011	後藤委員長	分子生物学会年会 女性比率調査第3回	
2012		分子生物学会年会 女性比率調査第4回	
		学協会連絡会第3回大規模アンケート調査WG	

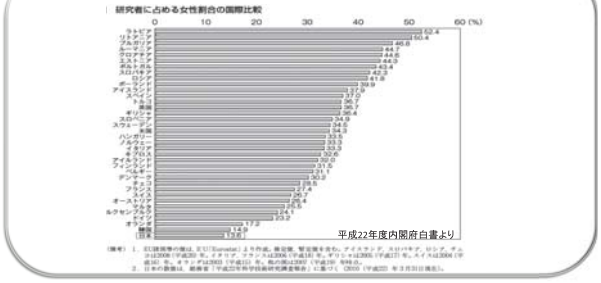
要 約

1. わが国では男女共同参画社会基本法（1999）をはじめ、女性の社会活動への参画促進、女性の能力を活用するための施策が数値目標を掲げて行われています。

2. 分子生物学会が、研究者実態調査の柱として年会参加者を対象に行った「属性調査」は、 性差に関わらず研究者の活躍を促す目的で開始したものです。2009年来の結果から、本会会員が属する性（属性）と、シンポジウム等目で見える形で活躍する研究者の属性との間には、 大きな開きがあることがわかりました。他のWG活動から得られた調査結果と総合し、浮び上がった課題のひとつは、「意識改革の必要性」です。男女共同参画委員会では年会企画テーマに取り上げるなど、会員皆様と双方向の議論を試みていますので今後も発信を続けていきます。

3. 科学分野の各学会における取組みを連携させる仕組みとして「男女共同参画学協会連絡会」が2002年に組織され、日本分子生物学会は当初より中心的役割を果たしています。女性研究者の活用と活性化のための活動、国の施策に反映させるための活動として、数々の提言や要望書活動を積極的に行ってきました。施策へも反映された例として、大学機関等モデル事業や、復帰支援事業（RPD制度）等の整備が実際に行われました。その基礎力となっているのが、研究者実態データの収集・解析を目的とする、大規模アンケート調査です。これまでに、2003,年 2007年に実施され、約20,000人の回答が得られました。現在、第3回大規模アンケート調査を実施中ですので、ひとりでも多くの方のご協力をお願いいたします。

世界の中で日本は 今・・



研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告

毎年好評を博しております若手教育シンポジウムを第35回日本分子生物学会年会でランチョンセミナーとして行いました。毎度のことですが、早朝からの配布にも関わらず、用意した参加整理券は瞬く間に無くなり、この会に寄せる期待の大きさを改めて感じました。今回は新しい試みとして、参加者が携帯電話やスマートフォンからリアルタイムでコメントを述べ、パネリストと意見交換できる完全聴衆参加型の会を企画しました。結果として、後述のアンケート結果にもありますが80％の人が本システムを「有効」と評価し、『シンポジウムに対する全体的な感想』の設問では、6年目にして初めて、「あまり面白くなかったorつまらなかった」のいずれも「ゼロ」という高い支持を得ることが出来ました。これも、準備から多くの時間を割いてくださった委員の方々、講演をお引き受け下さった洪先生、事務局の並木さんをはじめ関係者の方々の努力のおかげです。感謝いたします。

〈準備段階〉

塩見美喜子委員と私小林が世話役となり企画、準備を進めてまいりました。2012年1月からメールでテーマについての相談を開始し、昨今の深刻な留学者数の減少と、研究室内あるいは周囲との相互理解の不足から生じたと思われる問題が増えていることから、「国際化とコミュニケーション」について考えてみようということで委員の意見が一致しました。

第一部の講演は、国際的に活躍しておられる慶應義塾大学の洪実先生にお願いしてご快諾を頂きました。洪先生のお人柄から、準備会議でも和気あいあいと、また非常に貴重なお話もたくさんして頂き委員も勉強になりました。本当に感謝です。

第二部ですが、最初はコミュニケーションの専門家に話をしてもらう案もありましたが、具体的な事例から議論した方がより効果的であろうということで、委員が問題提起者となり自身の考えを述べる形にしました。計4回の準備会議で内容を煮詰め、さらに「コミュニケーション」の重要性を議論する会ですので、それを実践するという意味で大勢の意見分布やコメントをリアルタイムでモニターできる「ケータイアナライズシステム」の導入を決めました。予行練習も東大塩見研究室の学生さん達の協力を得て行いました（感謝です）。また、本システムの運用は事務局の並木さんの多大なる努力なくしては出来ませんでした（感謝です）。

〈シンポジウム〉

「若手教育ランチョンセミナー2012
―研究者に必須なコミュニケーション力、発信力、国際力―」

司　会：小林武彦（遺伝研）、塩見美喜子（東京大学）

会場の収容人数限界（250名）の参加がありました。前のセッションが押してしまって、5分遅れでの開始となりました。

第一部：講　演（25分）
「グローバル化する科学のこれから―在米20年で見えてきたもの―」

洪　実（慶應義塾大学医学部）

洪先生の豊富な海外経験から、国際力の重要性やそのためのスキルアップの方法、心構えについてお話しして頂きました。先生は英語がすごく苦手であったこと、それにも関わらず米国で成功されたこと等、具体的でユーモア溢れるお話は、若い学生や研究者にとって最大限の励ましになったと思います。最後に、研究に対する情熱（passion）が最も重要だとおっしゃられた先生の言葉には、非常にリアリティがありました。

第二部：聴衆参加型パネルディスカッション（55分）
「めざせ！コミュプレ（コミュニケーション、プレゼンテーション）の達人」

パネリスト：五島剛太（名古屋大学）、後藤由季子（東京大学）、斎藤通紀（京都大学）、上村匡（京都大学）、柳田素子（京都大学）、白髭克彦（東京大学）

パネルディスカッシッションでは以下の6つのテーマについて話し合いました。

1．ラボ内のコミュニケーション
2．ITをつかったコミュニケーション
3．研究とプレゼンテーション
4．外国人とのコミュニケーション
5．英語でのプレゼンテーション
6．分子生物学会年会の英語化

あらかじめ用意したそれぞれのテーマに関連する設問（アンケート）に答えてもらい（Yes or No）、その意見分布を踏まえて、担当パネリスト（委員）が解説、問

題提起等を行ない、続いて他のパネリストが「こつ」や「経験談」を加えていきました。同時進行で会場からのコメントを募り、スクリーンにリアルタイムで表示していきました。それぞれのテーマの最後にコメントの中から重要なものをピックアップして議論しました。1テーマ8分と駆け足でしたが、パネリストからはワンポイントアドバイスや心構え等、ハウツー本にはない具体的な意見や、「この程度で十分」的な参加者を勇気付ける発言もあり、大変盛り上がりました。また会場からのコメント（なんと計118件！）は匿名で投稿してもらったこともあり、正直で大変よかったと思います。第二部の最後にはまとめとしてパネリスト一人一人から「提言」を頂きました。詳しい内容については「ケータイアナライズシステム」の集計結果や「全文記録（学会HPに掲載）」をお読み下さい。

目を引いた設問結果として、

●対人より対キーボードの方が得意？（No=78%）
●ラボメンバーよりウィキペディア等のネット情報を頼りにしている？（No=77%）

IT化が進む中でも、やはり人と人との直接的な対話が重要視されていることはいいことだと思います。

●英語がうまく話せれば外国で研究したい？（Yes=83%）

言葉の障壁はやはり大きいと感じました。ただ経験者の立場からすれば、海外で半年辛抱すれば言葉に慣れて（わからないことに慣れて！）、そんなにストレスでは無くなるのですが。なので、実際には言葉はそんなに大きな問題ではないと思います。「習うより慣れろ」です。これで留学が増えるといいのですが。

●分子生物学会は年会を完全に英語化すべき？（No=93%）

コメントを見ても年会の英語化は慎重に議論した方がよいようです。ただ国際化は避けられないので、知恵を出して両立出来るような「日本的」なシステムを構築すべきです。例えば午前（シンポジウム）はすべて英語、午後（ワークショップ、ポスター）は日本語、英語どちらでも可、といったように時間で区別するもの一案かもしれません。

〈ケータイアナライズシステム〉

集計結果（以下のデータは小数点以下四捨五入）

		Total	19歳以下		20代		30代		40代		50代		60代		70歳以上	
Q0−1	あなたの年齢は？	146	2	1%	100	68%	30	21%	12	8%	1	1%	1	1%	0	0%

		Total	男性		女性		回答しない	
Q0−2	あなたの性別は？	146	87	60%	59	40%	0	0%

		Total	Yes		No	
Q1−1	ラボ内のコミュニケーション（対同僚、対ボス、対学生を含む）はうまくとれていると思う？	141	109	77%	32	23%
Q1−2	過去に誤解からトラブルになった経験がある？	139	68	49%	71	51%
Q2−1	対人より対キーボード（メール、twitter、facebook等のSNSを含む）の方が得意？	139	31	22%	108	78%
Q2−2	ラボメンバーよりウィキペディア等のネット情報を頼りにしている？	139	32	23%	107	77%
Q3−1	プレゼン（口頭、ポスターともに）は得意（好き）？	141	73	52%	68	48%
Q3−2	「Yes」と答えた方にお尋ねします。→プレゼンの訓練（予行練習ではない）を受けたことがある？	70	22	31%	48	69%
Q4−1	外国人とのコミュニケーションは得意？	136	37	27%	99	73%
Q4−2	英語がうまく話せれば外国で研究したい？	136	113	83%	23	17%
Q5−1	英語でのプレゼン（口頭、ポスターともに）をしたことがある？	136	82	60%	54	40%
Q5−2	英語でのプレゼン（口頭、ポスターともに）を聞いても正直よくわからないことが多い？	137	94	69%	43	31%
Q6−1	分子生物学会は年会を完全に英語化すべき？	135	10	7%	125	93%
Q6−2	「No」と答えた方にお尋ねします。→完全に英語化されたら年会に参加しない？	123	24	20%	99	80%

コメント一覧

No	設問番号	ハンドルネーム	コ　メ　ン　ト
1	Q5−2		研究室内のミーティングでも英語を使用して、英語の勉強をする、という考えもあるが英語でディスカッションをすると、質問者も被質問者もつっこんだ内容で話せない。 ディスカッションが消化不良になることがあるのが難点。 何か良い勉強法はないものか…
2		ケータイゴング	こう先生、いい味ですね！
3	Q1−1	まっき	4 人に 1 人がとれてないのは多いのでは？
4	Q1−1	Matty	ラボ内のコミュニケーションから実験がうまく行った経験あります。
5	Q1	ej	トモダチ的な仲良しづきあいを求められるのはツライ。プロフェッショナリズムの不足を感じる。
6	Q1−1	やまさや	指導者が何人かいる場合に、あっちの先生はこう言ったけど、こっちの先生は違うことを言う、という板挟みになったことがあります。
7	Q1−2	なめ	ボスは学生を放置しすぎであり、我々に興味がない。
8	Q1		相手にコミュニケーションとる気がないときはコミュニケーションをとるのは難しいです
9	Q1	あいうえお	企業との共同研究だとディスカッション、コミュニケーションとりたいときに企業の方がいないので困ることがあります。コミュニケーションはやはりメールより電話、電話より直接？
10	Q1−1	やまさや	特に、臨床系の研究室では、ボスとのコミュニケーションが取れる時間を設けにくい。
11	Q2	のの	自分で実験したいと言ったら、教えてもらうのが嫌いなんだねと言われて、教えてもらえなくなりました…
12	Q1−1		むしろボスがすごく学生に来てくれる
13	Q1−1	en	ボスが忙しいのではないかと気をつかってしまうことはあります。
14	Q1−1	まっき	小学生の時からディベートの練習してるとやっぱり上手くなるんでしょうか
15	Q1−1	もやし	データ結果だけでなく、自分の研究へのモチベーションなども聞いて欲しい。　（明るくてスライド見えない）
16	Q1		ボスが来すぎてプレッシャーになる
17	Q1		絶対に人の意見を聞かないので、ディスカッションにならない人がいて困る。
18	Q1−1		ボスは学生とコミュニケーション取りたがってるよ
19	Q1−2	nody	先生と相性の合わない人がラボ内にいます
20	Q1−1	やまさや	若手対象のこういうセミナーがある一方、そのボスたちに、例えば「対等にコミュニケーションを」というような認知を広げる場は少ないのでは？
21		まこと	知識の差を意識してしまって議論しづらいです
22	Q1−1		雑用などでボスが忙しすぎ。サイエンスに避ける時間がたりない。
23	Q1−2		上は思ってるほど自分の実験をわかってない。だからこそこちらもしっかり発言していくべき。 コミュニケーションは対等とわかっていないボスや研究室は発展しないのでは。
24	Q1	ccc	プライベートに関するコミュニケーションの程度はどのようにきをつけてますか？
25	Q1	ej	否定意見は必ずポジティブセンテンスで終える。
26	Q1−1	通りすがりの分生	ボスがテーマを管理しすぎると学生間でコミニュケーションが発生しにくい
27	Q1−2		ボスに構いすぎられるのもつらい。もうちょっと個人の考えとかを尊重して欲しいです。
28			15 に同意
29	Q2−1	GO	他大学の研究室との共同研究してるので、SNS 使用不可避 。
30	Q2		相手の反応をみながらコミュニケーションできるほうがよい。
31	Q2−1	Matty	Twitter は楽で、他の分野の人とも簡単につながれると思います！
32	Q2		yes 意外と多い。
33	Q2		ネット上での顔の見えない情報が多すぎてかえって不信感があり、アナログコミュニケーションのよさが今更感じられる。
34	Q2−1		メールなども必要だと思うけど、顔が見える方が楽じゃないですか？
35	Q2−2		Bio technical フォーラムはラボの人より参考になる場合が多い
36			メールでのボスとのビジネスライクなやりとりが 1 番仕事が合理的に進みます。
37	Q2−1	やまさや	熟考して、情報を正確に伝えられるのがテキストの利点かと思う。
38	Q2	レタス	上司と話す場合は文章に気を使ってしまいやりにくい。
39	Q2		対人より対キーボードの方が得意な人って普段あまりしゃべらないんですか？
40	Q2−1	Lion	SNS いいんですが今回の要項 (紙) がわかりにくいです

No	設問番号	ハンドルネーム	コ　メ　ン　ト
41	Q2		だいふく 言った言わないで誤解が生じるときがあるので、事務連絡はメールでも口頭でもやるべきだと思います。
42	Q2−1		文章の方が内容を正確に伝えられる、記録に残せる
43	Q2−1		ボスが忙しいからメールなど形に残ったものにしておかないとすぐに忘れられる。昨日言ってたことと違います！ってことを防止するために。
44	Q2−1	Y.F.	文字と音声でできる / できないコミュニケーションにはかなり差異がある気がします。
45	Q2−1	しろ	ケースバイケースだと思う。 ただ、メールは楽だが、直接コミュニケーションがとれないのはまずいので、積極的に対話は心がけるようにしてます。
46	Q2		Twitter は研究者の知り合いを増やすとかっかかりとして役にたっています
47	Q2		ボスのメールボックスはすぐいっぱいになるので直接言わないと後回しにされます
48			コミュニケーションといっても研究に関する内容なのかプライベートな内容なのかでよい手段がかわる
49	Q3−2	やまさや	訓練というと、例えばなにでしょう？
50	Q3	ej	プレゼン得意？の回答は男女比を反映してるかも？
51	Q3	よこ	どういう時に得意だ、と認識できるのか？
52	Q3	ccc	得意と思えることはいいことですけど、実際に上手いかはわからないですよね。
53	Q3−1	キムチ	プレゼンが上手くいったのか、意見をくれる人は少ない。データについては色々いってくれる人はいるけど…
54	Q3		訓練を受ける機会がなかなかなく、プレゼンを指導できる人が圧倒的に少ない。
55	Q3	あいうえお	大学の授業でプレゼンの訓練がありました。スライドの作り方、内容構成、プレゼン中のビデオをとられ、アドバイスを受けるといった内容で。 Sent from my iPhone
56	Q3−2		プレゼンの訓練ってどうすればよいものなのでしょう？
57	Q3−2	Y.F.	良いプレゼンの方法論を一般化し、秩序立って教えられる先生＆システムが日本には少ない / 無いのでは。
58	Q3−1		忙しいボスとのコミュニケーション (研究討論) が常にプレゼン。自然と上達できた。
59	Q3	sm	気乗りのしない内容をプレゼンをせざるを得ない時はどうしてますか？
60	Q3−2		プレゼンの訓練ってどうすればよいものなのでしょう？
61	Q4	ej	英語の方が敬語など気にせず話せて親しくなれる気がする。
62	Q3−1	通りすがりの分生	論文はデータ、プレゼンはストーリー。
63	Q3		プレゼンが上手かどうかは、きちんと準備、練習してきたかどうかに尽きますよ iPhone から送信
64	Q3		得意不得意はともかくとして、プレゼンが好きじゃない人は研究者に向いていないのでは…
65	Q3−2		プレゼンの訓練を受けてない人が多過ぎませんか？
66	Q3−2		卒論の時のボスが、プレゼン自体について、たくさん褒めてくれて自信がついたという経験があります。
67	Q3−1		学会以外にも発表の場、人に聞いてもらう場がほしい。できればフランクな。
68	Q3−2		外国ではプレゼンの訓練は当たり前なのでしょうか？
69	Q3		データすてるのだいじだとおもいます
70	Q3		スティーブジョブズだって準備に何日も費やしたそうですよ
71	Q3	よこ	52 に同感。わかる人にわかればよいという考えの人が多く、わかってもらうプレゼンに興味ないのでは？
72	Q3−2	ななし	一応受けたと答えがそこまで大層な内容ではなかった経験が…
73	Q3		岡目八目。見てもらうのは教授じゃなくても。
74	Q3−1		おたくほどプレゼンがおもしろい
75	Q4−2		英語が話せるなら外国にいきたいとは思いますが、いかないと話せない気もします。話せなくても言ってしまえば、上手くいくものなのでしょうか？
76			洪先生が１番おもしそうだからもっとはなさせてくれ！ 司会話しすぎ！ファシリテーターが一番話さないのは鉄則 !!
77	Q4−1	Matty	企業ブースの外国人の方と談笑できるレベルになりたい。
78	Q4		日本の研究室に外国人が少なすぎる。英語をしゃべる機会がない
79	Q4−2	巨人小笠原	不安だけど英語でのコミュニケーションができれば外国で研究してみたい。
80	Q4−1		うまく伝えようとしないで、恥を捨てて伝えようとすれば大体伝わります。

No	設問番号	ハンドルネーム	コ　メ　ン　ト
81	Q4−2		うまく話せないから…と思い込みすぎてるんじゃないでしょうか？案外通じるものだし、海外に行ってもみんな英語そこまでうまくない気がします。
82	Q4	ccc	日本人的ですが、得意かと聞かれれば no、苦手だと聞かれても no の人もけっこういるのでは？
83	Q4−2		外国で研究イコール英語ではないとおもう。私は国の言語が英語ではないところへ留学したので、その言語を学びながら研究しました。
84	Q4−1	Y.F.	大勢の日本人の中で外国人が放置されている姿をよく見ます。誰も話そうとしない。チャンスなのに。
85	Q4−1		英語を実際に話す機会がない。 ラボ全員が日本人でも英語で話す時間をつくるべき？
86	Q4		パネリストの中で留学経験のない方はいらっしゃいますか？留学しとけば良かったと思いますか？
87	Q4		ふだん英語を話す機会が多ければいいのに。ラボに英語を話す外国人がいるだけですごく練習になる。
88	Q4−1		間違えを恥じるから日本人は苦手に感じやすいのかも
89	Q4−1	とり	文法はメチャクチャだけど何を言いたいかは分かる、と言われるので多分得意
90	Q4	まり	話すのは得意ですが聞くのは苦手な場合、訓練方法はありますか？
91	Q4	maeno	ボスとの議論もうまくいかないのに更に言語の壁があったら手も足もでなくなりそうな
92	Q3		海外の研究者の方は下手な英語でも一生懸命理解しようとしてくれる。
93	Q4		英語が話せなくても外国で研究したいです。
94	Q4−1		英語で話すと人が変わります。ポジティブになる。二人称が you だからでしょうか。
95	Q4	あいうえお	ラボにインドネシア人、タイ人、アイスランド人、クエート人、たまにトルコ人がいて、みんなノンネイティブ。だから一向に正確な英語はしゃべれるようになっている気がしませんが、コミュニケーションは楽しいです。
96	Q4	ej	もどかしい思い、恥ずかしい思いをするほど、身につく、と思う。
97	Q4		セミナーに外人が来るときは絶対に予習します。
98		よこ	こうせんせいの公演で、英語がうまくなくても海外に行きたいと思い直しました。 パッションが薄いと英語を言い訳にするのかも！
99	Q4−1	ななし	どのレベルを以て「得意」なのかだと思います。「出来るか？」と聞けば案外イエスが増えるかも
100	Q4		話すのは下手でもいいとして、相手の言っていることがわからない場合はどうしたらよいのでしょう？
101	Q4		こう先生もっと喋って！
102	Q5		自分のやってる分野ならなんとかなりますが、違う分野になると、単語がほとんどわからない。
103	Q4−1		髪の毛が黒いと安心する。
104	Q5		英語プレゼン上達に必要なことは、とにかく一度経験して恥をかくことです。
105	Q5	やまさや	国によって、どんなプレゼン (スライドデザイン) が良しとされるかが全然違うということを、留学中に感じました。
106	Q4	ej	苦手なら単語数をへらす！敬語を直訳しない。
107	Q5−1		英語で発表したことない人 40% いるんですね。ラボでの研究報告とかでみんなしてるものかと思ってました。
108	Q5		聞くほうが難しい。こっちの話ぶりからレベルを察して質問してほしい。
109	Q5	sm	こんな高名な先生方でも質疑応答悩んでいるのをしって安心しました
110	Q5−1	Y.F.	結局英語もプレゼンもかいた恥に比例してしか上達しない気がします。
111	Q6	ej	たとえばこの若手教育のようなセッションも英語化するのは本質を失うのでは？
112	Q6		ショートトークの場で、明らかに、日本人しかフロアにいないのに英語で発表しているのに違和感を覚えました。外国人がいれば、英語でも良かったと思うんですが。
113	Q6		免疫学会は来年 完全英語化です
114	Q6−1		日本人同士なのに英語で議論しなければいけない意味がわからない。
115	Q5−2	はる	訛りが通じないことは日本人以外でもあるのはわかりますが、通じなかったら意味がないと思います。自分の訛りを自覚してノンネイティブにも通じる英語を目指していくべきでは？ iPhone から送信
116	Q6	巨人小笠原	完全英語だと外国の学会と変わりませんね。慣れていない学部生が行きにくい。
117	Q6−1	Y.F.	分子生物学会のアイデンティティが国内学会なのか、国際学会なのかをまずはっきりさせないといけないのでは。
118		ま	若手にとっては英語を学ぶことも大事ですが研究を学ぶのも大事。国内の学会はある程度日本語を残していただけるとありがたい。

〈アンケート結果〉
（回収数：178 名）
（回答は四捨五入で計算）

問１　あなたの年齢は？

①	24 歳以下	69	38.8%
②	25 ～ 29 歳	48	27.0%
③	30 ～ 34 歳	23	12.9%
④	35 ～ 39 歳	17	9.6%
⑤	40 ～ 49 歳	13	7.3%
⑥	50 ～ 59 歳	5	2.8%
⑦	60 歳以上	1	0.6%
※	未記入	2	1.1%
	計	178	100.0%

問２　あなたの現在の身分・職階は？

①	学部学生	21	11.8%
②	大学院生（修士）	60	33.7%
③	大学院生（博士）	29	16.3%
④	ポスドク	13	7.3%
⑤	大学教員（助教・講師・准教授）	28	15.7%
⑥	大学教員（教授）	6	3.4%
⑦	研究員	8	4.5%
⑧	主任研究員・チームリーダー・室長以上	3	1.7%
⑨	企業	9	5.1%
⑩	その他（記述なし）	1	0.6%
	計	178	100.0%

問３　あなたは PI（Principle Investigator：ラボの主宰者）ですか？

①	はい	13	7.3%
②	いいえ	159	89.3%
③	場合による	3	1.7%
④	わからない	2	1.1%
※	未記入	1	0.6%
	計	178	100.0%

問４　このシンポジウムを何で知りましたか？（複数回答）

①	学会ホームページ	79	42.5%
②	ポスター	14	7.5%
③	学会会報	32	17.2%
④	会場内の広告	21	11.3%
⑤	他人に聞いた	29	15.6%
⑥	リピーター	7	3.8%
⑦	その他（プログラム）	2	1.1%
⑦	その他（指導教員）	1	0.5%
⑦	その他（パネリスト）	1	0.5%
	計	186	100.0%

問５　このシンポジウムに対する全体的なご感想をお教え下さい。

①	とても面白かった	106	59.6%
②	まあまあ面白かった	54	30.3%
③	普通	8	4.5%
④	あまり面白くなかった	0	0.0%
⑤	つまらなかった	0	0.0%
※	未記入	10	5.6%
	計	178	100.0%

問６　このシンポジウムの内容に関する自由なご感想をお聞かせください。

・会場から笑いが起こり、全体的にとても楽しい内容だった
・研究をあらためて好きになれる非常に面白いセッションだった
・多様な人とのコミュニケーションの大切さが伝わったので、自分で出来る限りの英語習得の努力を続けようと考えた
・英語でのコミュニケーションに対して抵抗があったが、積極的にチャレンジしていこうと思う
・完璧な英語でなくても良いという話に勇気づけられた
・英語のプレゼンの話が非常に参考になった
・英語コミュニケーションの指導法が参考になった
・英語の重要性を再認識した（同コメント計２件）
・はじめは英語の学会がイヤだったが、参加してみたいと思った
・内容が会話の中で最重要であるという当然のことを改めて認識させられた
・学生、参加者とのコミュニケーションに重きをおいていて良かった
・今後のプレゼンや人生計画の参考になった
・研究に対する悩みや不安は、皆の共通するものだとわかった
・初めて参加したが、同世代の人の意見を聞くことができてとても参考になった
・他の若手がどういう意見をもっているのかわかって良かったが、具体性を感じなかったので、飲み会などで話したほうが良い議論になりそう
・ドクターへの進学を考えているため、是非これからも続けて欲しい
・今回初めて参加させていただきました、とても面白かったです、また来年も参加したいです
・セミナーの内容はとても面白く有意義だった、ありがとうございました
・とても面白くて参考になった
・初めて参加したがとても有意義だった
・話が面白く前向きでためになった

・大変面白い企画でした
・とても楽しく参加させてもらった
・気軽に参加できた
・今後の参考になった
・やる気になった
・非常に良かった
・面白かった（同コメント計３件）
・楽しかった
・とてもためになった
・もっと増やしても良い
・もう少し聞きたかった
・ありがとうございました
・チャレンジ精神が素晴らしい
・教育の効果だと思われるが、日本人のプレゼン力は上がっているように思う
・現在の学生はプレゼン上手が多い
・日本語で研究や学問ができるのは、それだけ日本で盛んであると誰かが言っていた
・ボスの教育も必要でしょう
・要は、指導教員が魅力的でないと学生は不利
・頑張っても成し遂げられないことが多いので、そういうことも若手研究者に示すべき（ゴードンやコールドスプリングハーバーのトークセレクション、トップジャーナルのアクセプト状況など、努力で乗り越えられないことが多いことも教えるべき）

【第一部：講演について】
・洪先生の講義が面白かった
・洪先生の話が非常に良かった
・洪先生ありがとう

【第二部：パネルディスカッションについて】
・様々な方の意見が聞けて良かった
・色々な方の意見を聞くことができたのは良かった
・色々なPIの方のカジュアルな意見が聞けて良かった
・パネリストの意見が豊かで楽しく学べた
・パネリストそれぞれに味があって良かった
・パネリストの人選が多様で良かった
・先生たちのアドバイスが聞けて良かった
・先生方が個性的だった
・パネルは面白い
・MC役の方が上手だった
・アッシャーがうまく導いてくれた
・率直な意見が多く、とても楽しく有意義な時間でした、ありがとうございました
・司会の進め方が上手く、パネリストの素直な解答が会を盛り上げたと思う
・時間が短かったが、司会のおかげでまとまった非常に良い会だった
・会場からの意見をもう少し多く取り上げていただければより面白かったと思う、ありがとうございました
・とても面白い内容で参加して良かったが、時間が短かったのでもっと議論を聞いていたかったと思った
・各設問に対して時間が短く、もう少し設問の数を絞ってでも深い議論ができればより良くなると思う
・テーマがもっとはっきりと絞られていた方が深い議論ができて良いと思う
・内容を詰め込みすぎではないか、半分くらいにした方がパネリストも意見を言いやすそう
・内容が多すぎたので、もっと絞ったほうが良い
・時間が足りなかったので、テーマの数を半分にしても良いと思う
・時間が短いので、もう少しテーマが小さいと議論が深まる
・慌しかったので、テーマ数は絞ったほうが良いと思う
・ディスカッションの項目が多いと思う
・慌しかったので、もう少し時間に余裕が欲しい

【ケータイをつかった聴衆参加型シンポジウム】
・聴衆参加型は参加者の本音がわかりやすくて面白い
・参加型がとても良いと思う
・ケータイを使用することで、意見や質問がしやすく、他の人の考えもいろいろ聞けて良かった
・初めて参加したが、ケータイを使うと想いが伝えやすい
・ケータイのやりとりがすごく活発で楽しかった
・直接のコメントや質問、まずい内容も、今回のようなコメントアップは良かったと思う
・コメントをリアルタイムで書き込めるシステムが面白かった
・新しくて良い
・有効かどうかはわからないが参加しやすい
・面白かった（同コメント計３件）
・面白かったが、コメントを見ていて話が聞こえないときもあった
・ケータイを使うアイデアはとても良かったが、もう少し使い方を工夫しても良かったと思う
・事前アンケートは良いが、ライブ参加型はスムーズでない
・聴衆参加型は面白かったが、コメントする人がほとんど同じ気がした
・もっと書き込みがあると思った
・自分のケータイ画面にも設問や意見がリアルタイムで見られると良いかと思った
・Twitterや他の方法の方が良いのでは
・Twitterの方が投稿しやすかったのでは

・クリッカーなどがいいのかな
・慣れていないので難しい
・メールではなく、フォームでコメントできると良い
・スマホじゃないと使いづらかった
・ガラケーなので使いづらい
・ケータイがないと参加できないのが残念だった
・ケータイを持っていないので参加できなかった
・ケータイを持っていない人の参加の仕方がわからなかった
・ケータイ等を持っていないので、入口で端末を貸して欲しかった
・プラットフォームがいまいち
・前のセミナーが長引き遅れて入場したため、システムがよくわからず参加しそびれてしまった
・遅れて参加したため URL がわからなかった
・聴衆参加型用の URL を常に掲示するか、紙面に印字して欲しかった
・弁当を食べているあいだに URL が消えてしまって参加できなかった
・ケータイでの参加方法のアナウンスが受け取れず参加できなかった
・第二部のときスライドが見にくかった
・スライドの文字が小さくて読みづらかった
・画面が小さくて見にくかった
・コメントが見づらかった
・何とも言えない
・ケータイで集めたコメント等について、学会ＨＰ上で公開してはいかがでしょう
・皆がアップした内容を後日 HP で見たいと思う

問７　このシンポジウムの開催時間帯はどうでしょうか？

①ランチョン形式がよい	169	94.9%
②夜間（18 時以降がよい）	5	2.8%
③その他の時間（13 時～）	1	0.6%
③その他の時間（記述なし）	2	1.1%
※未記入	1	0.6%
計	178	100.0%

問８　これまで、具体的な方法論と精神論的なテーマを掲げてきましたが、いかがでしょうか？

①具体的な方法論が良い	51	28.7%
②もっと本質的な議論の方が良い	26	14.6%
③時間が短くなっても両方とも必要	78	43.8%
※未記入	23	12.9%
計	178	100.0%

問９　『ケータイをつかった聴衆参加型レスポンスシステム』はいかがだったでしょうか？

①有効だった	142	79.8%
②あまり意味はない	9	5.1%
③その他	19	10.7%
※未記入	8	4.5%
計	178	100.0%

問10　今まで６年間、毎回趣向を凝らした企画を続けてきましたが、効果はどうでしょうか？

①多いに効果がある	68	38.2%
②多少効果はある	79	44.4%
③あまり効果は感じられない	7	3.9%
④全く効果はない	0	0.0%
※わからない	1	0.6%
※未記入	23	12.9%
計	178	100.0%

問11　今後このような試みを続けるべきだと思いますか？

①是非続けるべき	156	87.6%
②続けるべきだが方法を変えた方が良い	11	6.2%
③止めた方が良い	0	0.0%
④わからない	4	2.2%
※未記入	7	3.9%
計	178	100.0%

問12　今後取り上げて欲しいテーマがありましたらお教えください。

・今回出たプレゼンの上達・訓練
・プレゼンテーションスキルの向上
・プレゼンのコツをもっと深く
・プレゼンの具体策
・伝わりやすいプレゼンテーションの作り方
・プレゼン苦手対策：努力！準備！練習！知恵！Passion ！
・留学経験を伝えるセミナー（ただし、色々な国に対しての発表が欲しい）
・英語を話すことや留学することをより大きく取り上げて欲しい（話せないまま留学した経験についてなど）
・留学先との交渉経緯や現地での研究の様子、金銭の問題など、研究留学について先生方の具体的な経験を知りたい
・世界で競争していくうえで、日本で研究できることの強みについて
・研究に携わり続けるための生き方
・海外で PI になる方法
・ティーチング vs コーチング
・研究室立ち上げ・運営のノウハウ
・研究者としてのキャリアパスの実状（PD の終了後等）
・キャリアパスを選択するときのアドバイス等
・キャリアパス（同コメント計２件）

・就活
・理系就職
・パーマネントポストを取るために必要なこと
・ポスト問題
・PD 問題
・博士課程に進む際の是非
・Ph.D が企業で求められるようになるには何が足りないのか
・生物学（特に基礎）は今後 10 年で負け市場にならないかなど、生物学全体の流れに関して
・今回のように研究者たちの生の想いを拾う（パネリストが答えるという形式が良い）
・専門分野分けして大規模におこなわれたら楽しいと思う
・若手と若手が知り合える会
・直接話し合える会
・コミュニケーション
・効率良く分野間のつながりを深めるためにはどうすれば良いか
・分野について
・論文捏造問題
・知財
・組織力
・宇宙生物学
・研究者の理想のカタチ
・日本の科学技術のこれから

問13　その他、ご意見ご感想などなんでもどうぞ。

【開催形式について】
・大会場でお願いします
・部屋を大きくしたら良かった
・時間が長く取れるなら夜でも良い

【そのほか】
・今回の学会は色々とすごく便利で良かったが、道具を持っているかいないかで差が出るのもどうかと思った
・一度こういったセミナーを英語でおこない、最後に内容に関するテストをして理解度を量ってみてはどうか
・時間が押したのが残念、もっとゆっくりやりたい

〈全体総括〉

今回のテーマ「コミュニケーションとプレゼンテーション」は、これまでのアンケートで要望が多かったものでもあります。少し「詰め込みすぎた」感がありますが、幅広くやったおかげで多くの情報や若手の考え方に触れることが出来ました。例えば改めて感じたことは、若手の教育の現場は「個性的」で、ラボによって千差万別だと言うことです。ラボが違えば国が違うといったら言い過ぎかもしれませんが、PI の考え方で教育の方針が大きく異なるようです。以前はこのような「個性派」教育でもよかったのかもしれませんが、人材の流動化、国際化が進む昨今、ある程度一般的で世界標準を理解した若手の育成が必要だと思われます。実際に当ワーキンググループ委員の間では今回のテーマであまり意見が割れることはなく、その意味では教える側の基準はしっかりあるのだと思います。どこでも通用する「常識」を示していくのが本教育シンポジウムの１つの使命のように思います。学会は研究者の卵が所属研究室から出て、外の空気に触れる絶好の機会です。今後も本教育シンポジウムの役割は大きいと思います。

若手教育問題ワーキンググループ座長
小林　武彦（国立遺伝学研究所）

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第18期新理事会準備会議記録

日　時：2012年10月27日㈯16：00～18：20
場　所：東京国際フォーラム　G棟　4階「401」
出席者：第17期
小原雄治　理事長（第18期理事兼）、石野史敏庶務幹事
第18期
荒木弘之、五十嵐和彦、一條秀憲、上田泰己、上村　匡、大隅典子、岡田清孝、近藤　滋、相賀裕美子、佐々木裕之、篠原　彰、島本　功、高橋淑子、田中啓二、長田重一、中山敬一、西田栄介、花岡文雄、町田泰則、三浦正幸、渡邊嘉典　第18期理事　以上22名
委任状：阿形清和、石川冬木、大隅良典、後藤由季子、月田早智子、山本正幸、山本雅之　以上7名
欠席者：塩見美喜子（第18期理事）
事務局：福田　博、並木孝憲（記録）、丸田夏子

本会議の成立について：

石野史敏庶務幹事より、本会議の開催の位置付け・成立につき、定款（抜粋）の説明がなされた。第18期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いは理事会に準ずることが確認された。18期理事22名が出席し、委任状7名を受理しており、本会議は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

小原雄治第17期理事長より、議事録署名人として、荒木弘之18期理事と五十嵐和彦18期理事が指名され、承認された。

議　事：

1. 第18期理事長（任期：2013年1月より2年間）の選出

議事に先立ち、小原理事長より、フランクな意見交換をするために本学会に関係する一言を副えた自己紹介をしてはどうかとの提案がなされ、18期理事22名による自己紹介がなされた。

議事の進行については、被選挙権のない石野庶務幹事が担当することが了承され、事務局より理事長選出に関する細則（第2章第3条）の説明が行われた。

第17期からの引き継ぎ事項として、論文不正問題への対応、高校新学習指導要領の実施に伴う社会との連係（出前講義）、年会をさらに魅力的なものにするための取り組み、これら3点が特に重要であることが小原理事長より報告されたのち、18期理事による自由討論に入った。

提出された意見は以下のようなものであった。

・生物学イコール分子生物学となっている状況からみても、分子生物学会が生物学分野を牽引する立場の学会であることを理解し、強いリーダーシップが発揮できる方を理事長に選びたい。
・加盟団体の増加を目指している生科連（生物科学学会連合）との関係において、分子生物学会のスタンスは重要である。
・様々な面での変革を求められている時期だからこそ、安定感のある方を理事長に推薦したい。
・分子生物学会が変革に取り組んでいるメッセージを一般会員にわかりやすく伝えられるような方が望ましい。
・18期では過去最多6名の女性理事が選出されている。次期の理事長には女性が相応しいのではないだろうか。
・男女共同参画への取り組みが新たなステージに入っている分子生物学会としては、その次のステージを摸索できる方にロールモデルを築いていただきたい。
・17期から引き継がれる重要な申し送り事項が多いことからも、現理事長の再任がよいのではないか。
・生化学会との関係をどうするのか、候補者が挙がった段階で推薦された方からの見解を伺いたい。
・若い候補者を推したい。
・年会（学術集会）の開催が分子生物学会のひとつの大きな役割であるからこそ、学会間の意見集約ができる生物系のメタ学会として、本学会の取り組みは結果的に会員のベネフィットになるのではないか。
・事業仕分けを機に行政への様々な働きかけをしてきた分子生物学会であるが、会員の自由を保障しながら基盤を構築する、あるいは社会に貢献するという観点からも、伝統である自由闊達な雰囲気と組織力とのバランスが重要である。
・分子生物学会は研究発表を第一とし、研究環境を取り巻く諸問題に対しては他学会と一線を画してきた文化がある。それを変えてもよいのか。
・生命科学系でどのような大型研究の計画を立てるかなど、幅広い研究者コミュニティをもつ本学会は、理事長が先頭に立ってそれらを推進することが望ましい。
・分子生物学会には、執行部や学会事務局が理事長をタイムリーにサポートできる体制があるが、次期はさらに理事会執行部を強化していく必要があるであろう。

活発な意見交換が行われた後、18期理事により投票が行われ、第18期理事長として大隅典子氏が選出

された。

2．第18期副理事長について

事務局より細則第4条（副理事長の設置）の説明がなされた。第18期大隅理事長より、副理事長は2名設置したいとの要望が出され、それを原則とし投票を行い、第18期副理事長として、小原雄治氏、中山敬一氏が選出された。

3．その他

ⅰ　論文不正問題の対応につき、検討と意見交換が行われた。

ⅱ　第36回（2013年）年会長の近藤滋理事より、海外在住のポスドク（滞在期間の長さを基準に選定する予定）を年会に招聘する企画を検討している旨の報告がなされた。本企画の実現には約2,000万円（200名×10万円で試算）の旅費支出が見込まれるが、36回年会の予算ではまかなえない可能性が高いため、学会本部会計からの特別支出支援（約1,000万円を想定）を要請したいとの説明があり、企画の方向性については賛同を得た。ただし詳細については、会計幹事が出席する次回理事会にて確認することとなった。

上記、第18期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2012年10月27日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
第18期新理事会準備会議
議　　長　　小　原　雄　治　㊞
議事録署名人　　荒　木　弘　之　㊞
議事録署名人　　五十嵐　和　彦　㊞

◆特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第17期第3回理事会記録

日　時：2012年12月10日㈪15：10～16：55
場　所：福岡国際会議場　4階「404 + 405」
出席者：小原雄治（17期理事長）、相沢慎一（副理事長）、大隅典子（副理事長）、阿形清和（第35回年会長兼）、後藤由季子、小安重夫、塩見春彦（会計幹事兼）、杉本亜砂子、月田早智子、永田恭介、中山敬一、鍋島陽一、花岡文雄、三浦正幸、町田泰則（監事）、石野史敏（庶務幹事）、上村　匡（編集幹事）、荒木弘之（広報幹事）、篠原　彰（広報幹事）、近藤　滋（第36回年会長）、以上20名
欠席者：審良静男、五十嵐和彦、石川冬木、上田泰己、貝淵弘三、影山龍一郎、五條堀孝、白髭克彦、田中啓二、谷口維紹、西田栄介、水島　昇、宮園浩平、柳田充弘（Genes to Cells編集長兼）、山本雅之、米田悦啓、勝木元也（監事）、諸橋憲一郎（集会幹事）、以上18名
事務局：福田　博（記録）、並木孝憲、丸田夏子、岩田眞弓

本理事会成立について：

石野史敏庶務幹事より、理事14名、監事1名、幹事4名、議題関係会員1名が出席し、委任状15名（理事）を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

小原雄治理事長より、議事録署名人として、後藤由季子理事と中山敬一理事が指名され、承認された。

議　事：

第17期理事会の最終会議となる本会合に先立ち、小原理事長より挨拶がなされた。

1．報告事項

1）執行部報告（理事長、庶務幹事、広報幹事）

・会員現況

石野庶務幹事より、2012年12月1日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員	1名	
正 会 員	9,930名	（海外在住216含む）
学生会員	5,319名	（海外在住63含む）
賛助会員	31社	
合　　計	15,281名	（前年12月対比、－196）

2）理事選挙結果報告 / 第18期理事長および副理事長選任結果報告

石野庶務幹事より理事選挙結果の報告がなされた。また、2012年10月27日に東京で開催された第18期新理事会準備会議において、大隅典子氏が第18期理事長に選出され、同副理事長には小原雄治氏、中山敬一氏が選出されている旨報告された。

【第18期理事選挙結果】

選挙公示日：2012年6月12日㈫（会報102号発送）
投 票 期 間：2012年6月22日㈮9：30
～7月12日㈭18：00
開　票　日：2012年7月13日㈮
開 票 場 所：日本分子生物学会　事務局

開票立会人：選挙管理委員３名
（飯野雄一、漆原秀子、大杉美穂）
および17期庶務幹事（石野史敏）
有 権 者 数：14,141名
投 票 者 数：　760名
投 票 総 数：7,600票（うち白票2,216票）
当　選　者：下記30名（50音順）
阿形　清和（京大・理）
荒木　弘之（遺伝研）
五十嵐和彦（東北大・医）
石川　冬木（京大・生命）
一條　秀憲（東大・薬）
上田　泰己（理研・CDB）
上村　　匡（京大・生命）
大隅　典子（東北大・医）
大隅　良典（東工大･ﾌﾛﾝﾃｨｱ研究機構）
岡田　清孝（基生研）
後藤由季子（東大・分生研）
小原　雄治（遺伝研）
近藤　　滋（阪大・生命機能）
相賀裕美子（遺伝研）
佐々木裕之（九大・生医研）
塩見美喜子（東大・理）
篠原　　彰（阪大・蛋白研）
島本　　功（奈良先端大・バイオ）
高橋　淑子（京大・理）
田中　啓二（都医学研）
月田早智子（阪大・生命機能）
長田　重一（京大・医）
中山　敬一（九大・生医研）
西田　栄介（京大・生命）
花岡　文雄（学習院大・理）
町田　泰則（名大・理）
三浦　正幸（東大・薬）
山本　正幸（かずさDNA研究所）
山本　雅之（東北大・医）
渡邊　嘉典（東大・分生研）

本選挙においては、当選者の中から１名の理事就任辞退者が出ており、「理事選挙に関する選挙管理委員会内規」に基づき、選挙管理委員長と17期理事長で協議を行い、その結果、次点者を繰上げ当選としている。

３）第10回日本分子生物学会三菱化学奨励賞選考結果報告

小安重夫賞選考委員長より、標記奨励賞候補として７件の応募があり、委員会による審査・選考の結果（第１次審査はメール持ち回りによる書類審査、第２次審査は東京にて選考委員会を開催）、以下の２名が受賞者として決定したことが報告された。

○ 齊藤 博英（京都大学 白眉センター、iPS細胞研究所　特定准教授）
【研究題目】
（和文）機能性RNAの分子デザインによる翻訳・細胞運命制御システム構築の研究
（英文）Translational regulation and cell fate control by constructing functional RNA molecules

○ 鈴木 淳史（九州大学 生体防御医学研究所　准教授）
【研究題目】
（和文）肝臓における細胞分化と増殖のメカニズム
（英文）Mechanisms of liver cell differentiation and proliferation

４）各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

小安賞推薦委員長より、2012年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、月田早智子研究助成選考委員（西田栄介選考委員長代理）より、2012年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

５）第１回（2013年）国際会議支援選考結果報告

篠原彰国際会議支援選考委員（西田選考委員長代理）より、第１回目となった本支援事業への応募、ならびに本委員会の選考手続きにつき説明がなされた。慎重な審査を経て、以下の４会議（計700万円）が採択されたことが報告された。

≪会議名称≫
（和文）第４回ミトコンドリア・ダイナミクス国際会議
（英文）4th International Symposium on Dynamics of Mitochondria
（略称：DynaMito2013）
開催責任者：岡本 浩二（大阪大学大学院生命機能研究科・特任准教授）
会期：2013年10月28日㈪～11月１日㈮
会場：沖縄残波岬ロイヤルホテル（沖縄県中頭郡）
助成金額：250万円

≪会議名称≫
（和文）酵母からのエピジェネティクス研究へのメッセージ ～酵母が明らかにする生命科学の最先端～
（英文）Message from yeast to Epigenetics ～ Yeast clarifies the frontiers of life science ～
開催責任者：沖 昌也（福井大学大学院工学研究科・准教授）
会期：2013年９月２日㈪～４日㈬
会場：グランディア芳泉（福井県坂井市）

助成金額：200万円

≪会議名称≫

（和文）第10回プロテインホスファーゼ国際カンファレンス

（英文）10th International Conference on Protein Phosphatase

開催責任者：中釜 斉（国立がん研究センター研究所・所長）

会期：2013年2月7日㈭～9日㈯

会場：がん研究振興財団 国際研究交流会館（東京）

助成金額：150万円

≪会議名称≫

（和文）第8回細胞シグナリングに関する日韓若手交流会議

（英文）The 8th Japan-Korea Conference on Cellular Signalling for Young Scientists

開催責任者：八木澤 仁（兵庫県立大学大学院生命理学研究科・准教授）

会期：2013年11月6日㈬～9日㈯

会場：イーグレひめじ（兵庫県姫路市）

助成金額：100万円

6）科学政策委員会・ワーキンググループ活動報告

中山敬一理事（科学政策委員会世話人）より、本年2月、本委員会の下部組織として、2つのワーキンググループが発足し、それぞれ4月と5月に1泊2日泊り込み集中会議を開催したことが報告された。2つの会合の記録（テープ起こし）は計310ページにもおよび（記録は世話人および事務局にて厳重保管）、その討議内容を「現在の科学政策における問題点と解決策」（分子生物学会・科学政策委員会 報告）としてまとめた。同報告を資料として、17：00からの17期18期合同理事会にて審議したいとの報告がなされた。

ワーキンググループのメンバーは次のとおりである。

●研究環境・次世代教育担当ワーキンググループ

中山敬一（研究担当議長）、篠原　彰（教育担当議長）、貝淵弘三、影山龍一郎、近藤　滋、水島　昇

（2012年4月7日㈯～8日㈰、ニューウェルシティ湯河原にて会議を開催、オブザーバーとして小原理事長が参加．影山委員／欠席）

●科学政策提言戦略ワーキンググループ

中山敬一（世話人）、阿形清和、石川冬木、小安重夫、田中啓二、花岡文雄、小原雄治（オブザーバー）

（2012年5月12日㈯～13日㈰、ニューウェルシティ湯河原にて会議を開催、同会議には研究環境・次世代教育ＷＧより篠原委員が参加．阿形委員／欠席）

7）その他

・通常総会／議事進行と報告担当者の確認

・第2回富澤基金贈呈式について

小原理事長より、昨年に引き続き本年も“開かれた”総会を目指し、ポスター展示会場2階の休憩コーナー内に特設会場を設置して、総会を開催することが報告された。総会終了後には第2回富澤基金贈呈式が行われる予定である。理事会関係者においても多数参加してほしいとの要請がなされた。

引き続き、石野庶務幹事より、第35回通常総会資料についての説明がなされ、総会当日の議事進行ならびに報告担当者の確認が行われた。

2．審議事項

1）2012年度（平成24年度）収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より2012年度（平成24年度）会計の収支について説明がなされた。2012年度会計は同じ年度内に、最後の開催となる「春季シンポジウム」経費と、新しい事業である「国際会議支援」補助金支出の両方が盛り込まれたため、もともと赤字予算を組んでいたが、決算処理の結果、約888万円の黒字決算で終えることが出来た。黒字となったポイントは、①第34回年会（2011年横浜年会）会計の黒字．②Genes to Cellsの出版社からの総利益折半の精算収入．の2点である。昨年は震災の影響もあり会費収入がやや落ち込んだが、今年は納入率も持ち直している。各科目全般についての説明がなされた後、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金会計」についても詳細な報告が行われた。

本決算においては、消費税等約110万円を納めており、その他の税務処理については顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもとに、収益事業部分の法人確定申告を行っている旨報告がなされた。本決算は、10月30日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている。

財務諸表一式の説明がなされた後に、町田泰則監事より、11月15日、勝木元也監事とともに学会事務所にて会計監査を実施し、金融機関の残高証明書等を一式確認し、24年度決算を認めたことの報告がなされた。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第35回通常総会に諮られることとなった。

2）事務局の体制（スタッフ人員の強化と待遇改善）について

町田監事より、本学会の会計処理は適切なルールのもと（会計事務所の専門家が月に一度、資金

明細・出納内容を確認している)、非常に正確になされているが、それとは別に、事務局職員の勤務状況（残業・深夜残業ならびに休日出勤（特に事務局長）が非常に多い）についての報告がなされた。現在、事務局の体制は、事務局長を含む正職員3名と非常勤契約職員（原則週3日勤務）1名ですべての業務にあたっているが、数年前に比べ、その担当業務はかなり広範に増えており、他学会と比べても15,000名の事務局業務を実質3.5人で行っていくことには相当な無理を生じている。就業規則にある有給休暇等もほとんど取得できない現在の勤務状況は至急改善すべきであろうとの意見が提出された。

本件については、17期、18期の両理事長ならびに石野庶務幹事のほうでも対応策を検討中であり、今後すみやかに事務局長を交え、来年以降の事務局体制（強化・増員）につき具体的な対応策を進めていくことが確認された。

さらに出席の理事若干名より、事務局職員の待遇改善（確認）についても意見が出され、事務局長より「就業規則・給与規程等については、理事長、庶務幹事、会計幹事が確認を行い、その承認をもって運用される」旨、規則の説明がなされた。本件については、18期理事会執行部に申し送ることとし、さらに規程検討作業を行う際には、本規程の作成・適用時（2006年8月）に学会長であった花岡理事がアドバイザーとして参画することとなった。

3）2013年度（平成25年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より2013年度（平成25年度）の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。新年度については、①第35回福岡年会は新しい試みが多く、年会黒字が出ないことが予想される、②GTCの出版収入は為替レートも考慮し、かためにに見積もっている、③GTC編集費における総説オンラインオープン費用（学会負担分）の支出増、④事務局の強化・補充のため給与手当の支出増が見込まれること、その他、現在の経済状況を考慮し、2013年度会計においては870万円の赤字予算を編成することとなった旨説明がなされた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は理事会で承認され、第35回通常総会に諮られることとなった。

4）第37回（2014年）年会長について

小原理事長より、第37回年会については、年会長を慶應義塾大学医学部 小安重夫会員に依頼したいことが諮られ、承認された。（開催地：横浜、会期：2014年11月25日㈫～28日㈮／会場については事務局にて2010.8月に確保済み）

5）加藤論文問題について

小原理事長より、今年初めから現在に至るまでの本件に関する経緯につき、詳細説明がなされた。論文問題はきちんとした根拠をもとに議論しなければならない案件であり、東大の対応を待っていた結果、ここまで時間を費やしてしまったことについてお詫びの言葉が提示された。

同論文問題については、10月27日に開催された第18期新理事会準備会議でも活発な討論がなされており、その後、11月2日に執行部会議を開催し検討を行い、要望書を作成するに至った。第17期執行部の責任のもとに、11/8付速達書留にて、東京大学総長・分子細胞生物学研究所長あてに「加藤茂明元分子細胞生物学研究所教授の論文不正問題に関する早急な情報開示の要望書」を提出している旨、その詳細報告がなされた。

その後、自由討論に入り、

・現状報告と今後の対応をどうするか。
・学会として一定の見解を早く発表したほうがよい。
・文科省等の対応はどうなっているのか（情報収集）。
・そもそも学会としての対応が遅すぎるのではないか。
・東大発表を待つにしても、今どういう状況にあるかということを表明したほうがよいのではないか。
・エビデンスがはっきりしないので調査結果を待つしかない。
・正確な情報なしで、緊急フォーラム（12月11日㈫18：10～／福岡国際会議場『研究不正を考える―PIの立場から、若手の立場から―』において、どのような議論が可能であるか。
・学会という組織は責任を追う立場にはない。

等々の意見がなされた。

審議の結果、先ずは、11/8付で提出している、東京大学あての要望書をすみやかに学会ホームページに掲載することが決定された。（同日深夜、要望書はＨＰに公開された）

上記、第17期第3回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2012年12月10日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
第17期第3回理事会
議　　長　小原雄治　㊞
議事録署名人　後藤由季子　㊞
議事録署名人　中山敬一　㊞

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第 17 期・第 18 期　合同理事会記録

日　時：2012 年 12 月 10 日㈪ 17：00 ～ 20：00
場　所：福岡国際会議場　4 階「410」
出席者：第 17 期
小原雄治○（17 期理事長、18 期副理事長）、大隅典子○（17 期副理事長、18 期理事長）、相沢慎一（17 期副理事長）、阿形清和○（第 35 回年会長兼）、後藤由季子○、小安重夫、塩見春彦（17 期会計幹事兼）、杉本亜砂子、田中啓二○、月田早智子○、永田恭介、中山敬一○（18 期副理事長）、鍋島陽一、花岡文雄○、三浦正幸○、石野史敏（庶務幹事）
（○印は 18 期継続理事）
第 18 期
荒木弘之（広報幹事兼）、一條秀憲、上村　匡（編集幹事兼）、相賀裕美子、佐々木裕之、塩見美喜子、篠原　彰（17 期広報幹事兼）、近藤滋（第 36 回年会長兼）、町田泰則（17 期監事兼）、山本正幸、渡邊嘉典、以上 27 名
欠席者：第 17 期
審良静男、五十嵐和彦○、石川冬木○、上田泰己○、貝淵弘三、影山龍一郎、五條堀孝、白髭克彦、谷口維紹、西田栄介○、水島　昇、宮園浩平、柳田充弘（Genes to Cells 編集長兼）、山本雅之○、米田悦啓、勝木元也（17 期監事）、諸橋憲一郎（17 期集会幹事）
（○印は 18 期継続理事）
第 18 期
大隅良典、岡田清孝、島本　功、高橋淑子、長田重一、以上 22 名
事務局：福田　博（記録）、並木孝憲、丸田夏子、岩田眞弓

本理事会成立について：
石野史敏庶務幹事より、理事 26 名、幹事 1 名が出席し、委任状 20 名（理事）を受理しており、本理事会は細則第 4 章第 8 条により成立する旨、報告された。
議事録署名人の選任について：
小原雄治理事長より、議事録署名人として、後藤由季子理事と中山敬一理事が指名され、承認された。
議　事：
1．報告事項
1）執行部報告（理事長、庶務幹事、広報幹事）
①会員現況
石野庶務幹事より、2012 年 12 月 1 日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員	1 名
正 会 員	9,930 名（海外在住 216 含む）
学生会員	5,319 名（海外在住 63 含む）
賛助会員	31 社
合　計	15,281 名（前年 12 月対比、－196）

②第 17 期活動報告（全般）
小原理事長より、総会資料（2 頁：2012 年度事業報告）に基づき、第 17 期の活動概要全般につき報告が行われた。
（ⅰ）昨年、東日本大震災への対応として、「復興支援ネットワーク掲示板」を立上げ情報発信に努めた。被災された学生会員と新入会の学生を対象に 2011 年度学会費を免除し、同様の申請に対して、第 34 回（2011 年）年会ならびに第 35 回（2012 年）年会の参加登録費を免除した。
（ⅱ）震災に際しては学会事務所も被害を受け、昨年 5 月に事務局が移転している。それに伴い、昨年の総会にて定款変更（法人事務所の所在地変更）を行った。
③加藤論文問題対応について
小原理事長より、本会合の直前まで第 17 期第 3 回理事会にて議論されていた内容について詳細報告がなされた（第 17 期第 3 回理事会記録参照）。
2）第 35 回（2012 年）年会について
①阿形清和第 35 回年会長より配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は Late-breaking を含め 3143 題（うち 12 題取下げ）、そのうち 405 演題はワークショップに採択され、2575 題がショートトークとして発表される予定である（後日、ショートトークは 32 演題取下げであった）。事前参加登録は 4761 名となり、また企業展示は 445 小間（NBRP、NBDC 含む）、バイテクセミナーは前年と同様の 25 枠となり、順調に準備が進んでいる。
続いて、スライドにより、本年会の特色について詳細説明が行われた。
・生化学会との分離・連続開催について
・コンセプト＝ IT 化
・プログラム企画・構成について（シンポジウム 9 テーマ、ワークショップ 100 テーマ、ポスター発表＋ショートトーク、市民公開講座）
・そのほかのチャレンジ（リクルート企画、高校生発表、iPad レンタル）

②第35回年会組織委員会からの申し送り事項

配付資料に基づき、阿形年会長より下記の申し送りがなされた。来年以降の年会運営に際し充分に留意されたい。重要と思われる事項については、引き続き、理事会において検討を重ねてほしい旨依頼がなされた。

【第35回年会組織委員会・申し送り事項】

1．日本製薬団体連合会（日薬連）への寄付依頼の件

重要なポイントは次の2点である。(2012.7.4 大阪医薬品協会へ阿形年会長が訪問 / 面談)

①参加費収入（学会本部からの開催補助金を含む）で全体予算の少なくとも30%は賄うべき．というのが日薬連のスタンスである。

②日薬連以外の団体からも寄付を募る努力をすること。

・経緯確認：日薬連は製薬会社の集まりであり、製薬企業にとってメリットのある学会に対して寄付を行なっている。理学寄りの基礎学会である本学会は、もともとは、長くその対象学会に参画できないでいた。医学分野を含めた幅広い領域をカバーする生命科学分野最大規模の学会であることから、第25回年会（2002年 藤井義明年会長）より支援対象学会の一つに加えてもらった経緯がある。

・継続して指摘されてきたこと

●日薬連以外からも寄付を集めること！

日薬連側としては、「学会は日薬連だけの寄付に頼るのではなく、広くいろいろなところから集める努力をすべき」という大方針があり、毎年「他の企業からも集めるように」と言われてきた。

2．ワークショップ・スピーカーの会員・非会員問題について

第35回年会において、WS講演者の約1/4が非会員であるといった事実が確認された。WSスピーカーの非会員比率が予想以上に高く（ここ数年、同様の比率）、非会員の指定演者については、入会しないまま、参加登録費も免除扱いとなってしまうケースが多い。これは公募（公募2月－締切3月）の段階で、オーガナイザーは学会員であることを条件としているが、指定演者には条件を設けていないことが大きな理由であり、年会運営において、7～8年同様の扱いが続いている。

第35回年会組織委員会としては、学会としての基本方針があるべきであり、理事会において検討いただきたいとの結論に至った。

3．シンポジウム・海外演者の謝金支払い等について

今年、問題となったケース ⇒ シンポジウム海外演者へ渡航費負担案内を記した招聘状をお送りしたところ、ある講演者より、渡航費は自身のtravel fundから出るので、渡航費の代わりに相当額の謝金をお支払いただけないか、という打診あり。⇒ 旅費と謝金は別物であり、旅費は出すけれども謝金は出さない．といった35回年会組織委員会のコンセンサスにより対応した。

↓

●シンポジウムに海外から演者を呼ぶ場合、どのように対応するのか、この点についての基本的な規定（文書になっていることが重要）があれば、毎年の年会組織委員会もそれにそって粛々と準備を進められるであろう。そのような年会運営に関する申し合わせが必要である。

個々に対応せざるを得ない問題もあるだろうが、混乱の大きな原因は年会に統一性と継続性が無いことだと思われる。理事会で、年会運営に関する申し合わせを策定すべきである。

〈以下、参考データ〉

○第35回年会における、シンポジウム海外演者　招聘条件は次のとおり。

参加費：無料

宿泊費：会期中の宿泊費無料（初日は前泊、最終日は後泊も年会負担）

旅　費：エコノミー実費（ビジネスでないと呼びにくい場合は応相談）

謝　金：無

（＊今年はシンポジウムのオーガナイザーにあまり無理をさせないことを基本としている．その分、WSに対しては手厚い支援はできないことを組織委員会の合意とした）

○第36回年会（2013年、近藤年会長）では、組織委員コア会議（プログラム委員長・副委員長も出席）で検討がなされ、すでに以下のように決定されている(2012.10.10)。

≪シンポジウム≫

34回年会と同様に、海外演者1名の場合は20万円、2名以上は30万円とし、会期中の宿泊費は別途年会で負担する。

≪ワークショップ≫

海外在住日本人ポスドクが演者となる場合は、無条件で「海外ポスドク招聘枠」で旅費補助を行う。また、可能な限りワークショップ演者に海外在住日本人ポスドクを含めてもらうことを年会として奨励する旨、オーガナイザーに周知する。

○第34回年会（2011年、花岡年会長）

≪シンポジウム≫

1．海外演者を1名招聘する場合は20万円、2名以上招聘する場合は30万円を旅費・滞在補助費として支給。

2．海外演者の会期中の宿泊（会場より徒歩5分のナビオス横浜）は、年会本部で用意（この宿泊費は年会が支出し、上記補助費には含まれない）。
3．国内演者については、旅費・滞在費・宿泊費の支給はなし。ただし、非会員演者の参加費は免除。
≪ワークショップ≫
1．海外演者の招聘にあたり、年会からの旅費･滞在費･宿泊費の支給はなし。ただし、海外招聘演者の参加費は免除。
2．国内演者についても、旅費・滞在費・宿泊費の支給はなし。ただし、非会員演者の参加費は免除。
○第32回年会（2009年、小原年会長）
≪シンポジウム≫
（第32回年会は、少なくとも2名の海外演者（PI）を含むことが条件であった）
1．海外からの演者招聘のため、年会から1シンポジウムあたり40万円を上限として補助。
2．海外演者の年会参加のための会期中の宿泊（会場より徒歩5分のナビオス横浜）は、年会本部で用意（上記補助費には含まれない）。
3．国内演者については、会員・非会員に関わらず、旅費・宿泊費・謝金等の支給はなし。ただし、非会員演者は参加費を免除。
≪ワークショップ≫
1．海外から演者招聘される場合は、年会から1ワークショップあたり10万円を上限として補助。
2．国内演者については、会員・非会員に関わらず、旅費・宿泊費・謝金等の支給はなし。ただし、非会員演者は参加費を免除。

4．年会運営・実務的なことに関係して
（ⅰ）事前参加登録費用：
参加登録手続き（振込み）を行ったが都合により参加できなくなった方から返金依頼があった場合の対応
→　カード決済入金者に限って、決済手数料・返金手数料を差し引いて返金可能としたらどうか？
（ⅱ）参加章（ネームプレート）：
事前送付者（事前参加登録者）用の参加章については、あらかじめ、氏名を印字することを実務準備のスタンダードにしたらどうか？（理由：参加章を他者に譲る／知人と交代しての参加、等々のルール違反を防ぐため）
――――――　＜申し送り事項はここまで＞　――――――
上記説明の後、阿形年会長より、年会運営における今後の重要なポイントとして、毎年の年会ごとではなく、学会として独自の「年会参加登録システム」（会員管理システムと連動・一元化）を検討すべき時期にきているのではないか、との指摘がなされた。

③年会終了後に、第35回年会Webアンケートを行い、アンケート結果は本年会の総括に用いるとともに、理事会へ報告し今後の年会運営の参考とされたい旨、阿形年会長より報告がなされた。同Webアンケート簡易システムは、質問項目を含め、17期執行部の確認は済んでおり、すでに11月末に学会事務局にてシステムが出来上がっている。アンケートは以下の日程で運用される予定である。
・12/20㈭学会HPでWeb公開（運用開始）
・12/21㈮メール一斉配信（アンケート案内の本文のなかにURLを埋め込む）
・アンケート受付期間：12月20日㈭
～2013年1月18日㈮17：00
・1月末日までに集計結果をまとめ、その後、学会HPで公開。
④会議出席者にiPad（理事会枠）が配付され、阿形年会長より取り扱い説明がなされた。会期中､理事会におけるシニアメンバーが率先して、新しいITシステムを試してみることとなった。
3）近藤 滋第36回年会長より、2013年の年会開催企画案につき報告がなされた。
○会　期：2013年12月3日㈫～6日㈮
○会　場：神戸ポートアイランド
○年会長：近藤　滋（大阪大学）
○年会組織
【組織委員会】

組織委員長	武田　洋幸（東京大学）
組織委員	荒川　和晴（慶應義塾大学）
	加藤　和人（大阪大学）
	杉本亜砂子（東北大学）
	塚原　克平（エーザイ・プロダクトクリエーション・システムズ）
	中川　真一（理化学研究所）

【プログラム委員会】

プログラム委員長	門脇　　孝（東京大学）
プログラム副委員長	塩見　春彦（慶應義塾大学）
プログラム委員	一條　秀憲（東京大学）
	後藤由季子（東京大学）
	小安　重夫（慶應義塾大学）
	夏目　　徹（産業技術総合研究所）
	三浦　正幸（東京大学）
	水島　　昇（東京大学）
プログラム庶務幹事	笹子　敬洋（東京大学）
	脇　　裕典（東京大学）

≪年会開催コンセプト≫
最近、生命科学がビッグサイエンス化する傾向にあるが、原点は、やはり個々の研究者の問題意

識と創意工夫である。グループ研究に埋没しがちな若手研究者に、サイエンスの楽しさと希望をもってもらえるような様々な仕掛け・工夫を凝らした「今までにない学会」を開催したい。

≪学術プログラム≫

学術プログラムは、プログラム委員会が企画・運営する。

・シンポジウム（13 テーマ予定）はすべてプログラム委員による企画とする。プログラム委員は、自分の名前を冠したシンポジウムを企画する。基本的に年会コンセプトに沿った企画であるが、どのように工夫し斬新なシンポにするかは、各委員に委ねている。

・ワークショップ（約 90 テーマ予定）は基本的に会員からの公募とするが、応募状況をみて、一部をプログラム委員企画で調整する予定である。

≪特別企画≫（案）

特別企画は組織委員会が企画･運営を行う（かっこ内は責任者（担当者））

●海外ポスドク呼び寄せ（年会事務局）

企画：200 名に 10 万円の旅費を支給し、特別セッションに参加してもらう。

目的：海外に居て、日本とのコンタクトの少なさに不安を持っているＰＤに安心感を与える。

●薬品ベンチャー主催シンポジウム（塚原 克平）

企画：国内薬品ベンチャー関係者によるシンポジウムを開催する。

目的：薬品ベンチャーの関係者が何を考え何を目指しているのかを、日頃あまりなじみの無い基礎系の研究者に伝える。また海外ＰＤとの懇談の場を用意し、キャリアパスにつなげる。

●ポスター発表 PodCast 化（年会事務局）

企画：ポスターの概要を Podcast でダウンロードできるようにする。

目的：ポスター発表の活性化。容易に各ポスターの内容を把握できるようにする。

●生命科学研究を考えるガチ議論（中川 真一・近藤 滋）

企画：科学政策の諸問題を議論するウェブサイトを開設。半年間の議論の後、年会で直接対決。

目的：文科省の担当官に常駐してもらうことで、「愚痴」ではなく、本当に現実的な改革案を科学者側が作り出せるのだろうか？　という実験をする。分子生物学会の科学政策委員会として行うのでなく、あくまで、年会が議論の場を提供するというスタンスは守る。

●分生版 TED（荒川 和晴）

企画：斬新で「聞く価値」のあるアイデアのプレゼンテーションショーを行う。

目的：一つには、エンタテインメント性を追求したプレゼンを経験することで、「発表の内容を印象づけるスキル」の重要性を若手層に印象づける。もう一つの目的は、生命科学の明日に影響を及ぼす可能性のある「アイデア」を広める事。

●学会とジャズの融合（塚原 克平、杉本 亜砂子）

企画：ポスター会場を使ってのミキサーの時、あるいは会期中の空いている部屋を利用し、学会員で構成されたバンドの演奏を行う。

目的：長い学会中にリラックスできる場を用意する。

●ここだけ 2050 年シンポジウム（加藤 和人）

企画：40 年後、という設定でのアカデミックシンポ。

目的：40 年後の分子生物学会はどうなっているのか？　という想像し、実演することで、生命科学の未来についてのイメージを学会員の中に育てる。

引き続き、近藤年会長より、特別企画（海外ポスドク呼び寄せ：200 名に 10 万円の旅費を支給）を実施するためには 2,000 万円の予算が必要であり、現状の年会予算（試算）で不足すると思われる 1,000 万円について、学会本部会計からの特別支出支援を負担してもらえないかとの要請がなされた。企画の方向性については賛同を得たが、最大 200 名とすることの人数の根拠、セレクションの方法、海外にいる人だけをサポートすることに問題はないのか、等々の意見が提出された。本学会は、年会の企画・運営についてのすべてを年会長に一任しているが、同時に年会予算についても本部定額補助金（現予算では 500 万円）以外については、年会長・年会組織委員会による自助努力による予算編成を行うことを基本としていることが確認された。

討議の結果、第 36 回（2013 年）年会に限って、近藤年会長の要請を基本的に認めることとし、最大 100 名分（1,000 万円）までを学会本部会計が負担することが認められた。しかし、近藤年会長には可能な限りの自助努力をしてもらうこととし、また、最大 1,000 万円までの会計負担の最終確認については、36 回年会の見込み収支が作成

されるしかるべき時期に、大隅典子第18期理事長が最終判断を行うこととなった（注：上記の特別支出・年会支援は、会計上は次々年度となる2014年度予算に反映されることとなる）。

4）小原理事長より、第37回（2014年）年会については、小安重夫氏（慶應義塾大学）に年会長を依頼し、本日開催した17期第3回理事会で決定したことが報告された。

5）上村 匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

2011年より一新した表紙デザインは国内外の購読者から高い評価を得ており、2013年も日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙デザインの制作を継続していく（2011～2012年の表紙 / cover art 一覧を資料配布）。また、昨年のデザインをもとに作成したオリジナルグッズ（ポストカードとクリアファイル）は専用サイト（学会ＨＰからリンク）での購入が可能となっている。

論文投稿数であるが、昨年より若干持ち直してはいるものの安定的な水準を維持する数にはなっておらず、短報、method paper 等も歓迎するなどの周知を続けていきたい。論文発表者の方々にはぜひとも self-citation をお忘れなきよう再度要請したい旨の説明がなされた。

著者が所定の費用を負担することで論文掲載と同時にオープンアクセスの設定が可能なサービス「Online Open」の導入から2年あまりが経過しているが、本年9月からは、総説についてはその費用を学会が負担することとし、利便性の向上・インパクトファクターの上昇を目指している。ただし、「Online Open」には1論文あたり3,000ドルの費用がかかるため、年間、何報程度の総説を受け入れるかなどの運用面については留意して進めていきたい。理事会関係者においては積極的な投稿をお願いしたい旨、上村編集幹事より依頼がなされた。

引き続き、出席理事より、『Genes to Cells』のインパクトファクター2.68は非常に危機的状況であり、現状への強い危機感の喚起が必要であるとの発言が提出された。思い切った若手の会員を登用して編集長と議論してもらう、新たな Genes to Cells の将来計画ワーキンググループの立ち上げなどの必要性が提示され、第18期理事会への申し送りとなった。

6）第2回富澤基金による研究助成の審査経過・結果報告

山本正幸基金運営委員長より、富澤基金による第2回（2012年）日本分子生物学会 若手研究助成の結果につき、その概要が報告された。

（ｉ）第2回応募の受付期間：2012年1月10日～2月10日

（ii）応募総数：105名（男性83名、女性22名 ※性別は名前からの推定による）

（iii）選考：

・第1次審査：書類審査

・第2次審査：11名を対象に6月20日にヒアリングを実施

（iv）審査経過と第2回助成対象者：

審査経過詳細については、会報103号（2012年11月号）に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第2回若手研究助成の助成対象者は以下のとおりである。

○伊原 伸治　国立遺伝学研究所構造遺伝学研究センター多細胞構築研究室
「基底膜の穴を制御する遺伝子の同定と分子機構の解析」

○王　丹　京都大学物質－細胞統合システム拠点
「RNA転写後制御の時・空間解析による神経回路制御機構の解明」

○鈴木 崇之　東京工業大学大学院生命理工学研究科
「脳内の中枢シナプス結合と可塑性をコントロールする決定因子の解明」

○宮田 淳美　京都大学大学院理学研究科生物科学専攻生物物理学教室
「マウス細胞内における28S rRNA上に生じた紫外線損傷の修復」

○山崎 正和　秋田大学生体情報研究センター
「平面内細胞極性を司る新規調節機構の解析」

7）後藤由季子男女共同参画委員長より、年会初日の12月11日に開催される、男女共同参画企画「全員参加の生命科学研究を目指して（パートⅡ：生の声を聞こう！）」が紹介された。昨年度と本年度の委員会企画では、参加者の声をうかがい今後の方針に反映していくことを目指している。今回は上記のタイトルと題して、ラウンドテーブルディスカッションを行なう。

ラウンドテーブルディスカッションの目的は

⑴　道を切り拓いてきた先達の話を聞いて元気をもらおう。

⑵　自分と同じような立場や悩みを持つ人の間で問題点や解決策をシェアしよう。

⑶　上記⑴⑵の生の声を通し、重要な問題点を抽出して今後の学会活動の方針に繋げようというものである.

今回の企画では、ライフワークバランスやキャリアパスといった観点からディスカッションリーダーを招いているので、理事各位においてもぜひ参加してほしいとの要請がなされた。

8）塩見美喜子理事（小林武彦若手教育問題ワーキンググループ座長代理）より、年会2日目の12月12日、ランチョンセミナー形式で、若手教育ランチョンセミナー2012「研究者に必須なコミュニケーション力、発信力、国際力」が開催されることが報告された。第一部では「グローバル化する科学のこれから―在米20年で見えてきたもの―」と題して、洪 実氏（慶應大）による講演を行う。第二部は「めざせ！コミュプレ（コミュニケーション、プレゼンテーション）の達人」をテーマに、洪 実氏とWG委員がパネリストとなり、参加者の意見をスクリーンにリアルタイム表示する『ケータイアナライズシステム』（会場において、自身の携帯電話・スマホから専用サイトへアクセスしてもらう）を使用し、相互討論ができる企画となっていることが報告された。

2．審議事項

1）第18期監事の選任

大隅典子第18期理事長から、第18期の監事として郷 通子会員、永田恭介会員が推薦され、承認された。監事選任については第35回通常総会で最終承認をとることとなる。

2）第18期理事会の体制、各幹事、各種委員会委員長・委員の委嘱について

大隅第18期理事長より、次期の理事長として第18期の間に以下のことに取り組みたいとの説明と挨拶がなされた。

① 若手キャリアパスの支援
② 科学研究教育施策に関するアドボカシー
③ 研究倫理に関する意識啓発

続いて、役員・幹事・各委員会名簿（案）が配付され、調整中である一部の委員会構成を除いて、ほぼ原案どおりに承認された。

18期理事会では庶務幹事を二人体制とし（石野庶務幹事は3期目の再任となるので、次期はできるだけ庶務幹事業務は本間美和子新幹事に引き継いでいく方向である）、広報幹事2名（荒木弘之理事/幹事兼、金井正美幹事）、さらにオブザーバーとして小原前理事長に執行部に入ってもらい、第18期理事会執行部としたい旨の説明があり、承認された。

【第18期執行部】
理 事 長：大隅典子
庶務幹事：石野史敏、本間美和子
広報幹事：荒木弘之（理事兼）、金井正美
オブザーバー：小原雄治（前理事長）

17期からの持ち越しとなった、生命科学教育（高等学校との連携による社会貢献活動）と科学政策については、新委員会をすぐに発足させるのではなく、執行部にて検討した上で、担当理事の設置、等々を進めることとなった。

男女共同参画委員会の発展的改組、若手キャリアパス問題の統合、若手教育問題ワーキンググループの委員会への格上げ・統合、についても活発な意見交換がなされ、本件については、17期の各委員長、18期の新担当理事と大隅新理事長にて、別途、検討の時間を設け、すみやかに調整を進めることとなった。（後日、「キャリアパス委員会」として発足することとなった）

3）第17期から第18期への申し送り（全般）について

小原17期理事長より以下3点につき報告・説明がなされた。

⑴ 加藤論文問題対応については、実質、第18期理事会への申し送りとなるが、小原17期理事長が18期の研究倫理委員長を担当し（大隅新理事長からの委嘱を受け）、18期の研究倫理委員会を構成し、適切に対応を進めていきたい。

⑵ 事務局の現在の体制についての説明があり、18期の理事長ならびに執行部にて留意してほしい。（第17期第3回理事会記録 審議事項2）を参照）

⑶ 上記⑴の関連事項であるが、明日夜に予定されている『緊急フォーラム』を終えた後、さらなる具体的な対応が18期理事会に課せられてくるが、18期理事のご協力をお願いしたい。

4）高等学校との連携による社会貢献活動について（来年以降の対応）

配付資料に基づき、篠原 彰理事（17期執行部/広報幹事）より、本事業の概要についての説明が行われた。

本年11月12日、「高校などへの講師派遣事業の協力のお願い」をＨＰに掲載し、翌13日に会員メール配信を行った。昨年の理事会・総会において決議されているが、その具体的内容は次のとおりである。

⑴ 分子生物学の講演、授業などを必要としてい

る高校（中学を含む）への会員の派遣

⑵　最新の分子生物学の講演会、講習を必要としている高校（中学を含む）教師の集まりへの会員の派遣

本案内に対し、2012年12月6日現在、152名より協力回答を得ており、その講師一覧（氏名・所属）につき報告がなされた。届け出いただいた情報は下記のとおりである。

①本人の基本情報：名前、所属機関（身分）、性別と連絡先

②専門分野：広義と狭義の両方（マッチングの時に使用予定）

③講義 / 講演可能な内容の希望：具体的なタイトルなど

④高校への出前講義、講演などの経験の有無：ある場合はおおよその回数

⑤派遣可能地域

具体的にどのように出前授業をマッチングしていくか、来期からの運用について、引き続き、篠原理事を中心に作業を進めてもらうこととなった。

5）日本分子生物学会三菱化学奨励賞について（来年以降の対応について）

標記奨励賞は、三菱化学との契約をもとに支援を受け（三菱化学との5年ごとの契約更新により毎年130万円 [副賞充当100万円(50万円×2名)選考経費等30万円] のサポートを受けてきた)、10年に亘って授賞者を輩出してきたが、本年12月4日付にて来年度以降の継続契約はできない旨の連絡を受けたことが、事務局より報告された。12月5日、福田事務局長が三菱化学ホールディングスの田中章部長、ならびに㈱三菱化学科学技術研究センターバイオ技術研究所･加藤尚樹部長(三菱化学㈱経営戦略部門RD戦略室 / 兼務）と面談を行い、正式にサポート打ち切りの内容を受理した。本件については、数カ月前より、事務局から小原理事長・執行部あてに逐次、状況報告がなされ、事務局長を通して三菱化学側との交渉を重ねてきたが、先方の経済的状況が主たる理由であり、学会としてはいたしかたないとの判断をしている。

引き続き、来年以降の対応について種々の意見交換がなされた。山本正幸理事から賞創設時の経緯についての説明がなされ､さらに出席理事より、もともと学会賞を創設してこなかった本学会の文化についての意見も提出された。新たな奨励賞を立ち上げるとしても充分に公平なシステムのもので検討されるべきであろうとの考えに集約されることとなった。

審議の結果、三菱化学奨励賞に替わる、あらたな奨励賞の創設については、慎重に時間をかけて来年の定例理事会で再度検討することとなった（来年度は奨励賞の募集は行わないことで、学会として支障はないとの確認がなされた)。

6）科学政策（研究環境・次世代教育 / 提言戦略）について

中山敬一18期副理事長（17期科学政策委員会世話人）より、本年2月、本委員会の下部組織として、2つのワーキンググループが発足し、それぞれ4月と5月に1泊2日泊り込み集中会議を開催したことが報告された。2つの会合の記録(テープ起こし）は計310ページにもおよび、本日配付の資料「現在の科学政策における問題点と解決策」（分子生物学会・科学政策委員会 報告）は、その議論内容をまとめたものである。

ワーキンググループメンバーは次のとおりであった。

●研究環境・次世代教育担当ワーキンググループ
中山敬一（研究担当議長)、篠原　彰（教育担当議長)、貝淵弘三、影山龍一郎、近藤　滋、水島　昇

●科学政策提言戦略ワーキンググループ
中山敬一（世話人)、阿形清和、石川冬木、小安重夫、田中啓二、花岡文雄、小原雄治（オブザーバー）

中山副理事長より､論点は以下のとおりであり、配付資料に基づき、個々の項目の問題点、解決案、反論についての説明がなされた。

Ⅰ．教育と人材育成に関すること

Ⅰ-1.　修士課程　修士課程と就活の問題

Ⅰ-2.　博士課程　大学院のミッションの再定義、大学院教育の質を上げる、博士課程の定員を減らす、大学院の経済支援

Ⅰ-3.　キャリアパス　博士課程修了後の就職難、キャリアとノンキャリアを分ける

Ⅰ-4.　留学　海外留学が激減している、留学グラントの問題

Ⅰ-5.　テニュアトラック　理研・地方大学におけるテニュアトラック制度を充実させる

Ⅰ-6.　定年後　定年制の問題

Ⅱ．研究に関すること

Ⅱ-1.　研究費　科研費を何とかする、申請書・報告書を簡素化する

Ⅱ−2. 国プロ　プロジェクト研究に関する問題
Ⅲ. その他　学会の統廃合、科学政策を実現するための道

出席理事により意見交換がなされ、科学政策については、引き続き、18期理事会において検討していくこととなった。

上記、第17期・第18期 合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2012年12月10日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
第17期・第18期 合同理事会
議　　長　小 原 雄 治　㊞
議事録署名人　後 藤 由季子　㊞
議事録署名人　中 山 敬 一　㊞

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　平成25年度（第35回）通常総会記録

日　　時：平成24年12月12日㈬18：30 ～ 19：15
場　　所：マリンメッセ福岡（ポスター / 展示会場）2階・休憩コーナー内特設会場
社 員 数（正会員＋名誉会員）：9,931名
出席者数：5,143名（本人出席76名、表決委任者5,067名）

議事内容：

1．小原雄治理事長より開会の挨拶、ならびに山中伸弥会員のノーベル生理学・医学賞受賞への祝意が述べられた。

2．定款第25条に基づき、小原理事長より本総会議長として林茂生会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名は、阿形清和会員（第35回年会長兼）と小原理事長が担当することが確認された。

3．林議長より、定款第26条（総会の定足数）に基づき、上記表決委任者（委任状）を含めて出席5,143名となり、本総会は成立する旨報告された。

4．経過報告（事業報告）

1）理事長報告

小原理事長より、総会資料（2頁：2012年度事業報告）に基づき、事業活動全般と、さらに下記3点につき報告が行われた。

①春季シンポジウムに代わるあらたな事業『第1回日本分子生物学会国際会議支援』の募集を行い、選考委員会の審査を経て、4会議に対して計700万円の助成を行った。

②第37回（2014年）年会長について

12月10日に開催された17期第3回理事会において、第37回年会については、小安重夫会員（慶應義塾大学）に年会長をお願いすることが決定した。

③加藤論文問題について

今年初めから現在に至るまでの本件に関する経緯概要につき説明がなされた。論文問題はきちんとした根拠をもとに議論しなければならない案件であり、東大の対応を待っていた結果、ここまで時間を費やしてしまったことについてお詫びの言葉が述べられた。

この問題については、11月2日に執行部会議を開催し慎重な検討を行い、要望書を作成するに至った。第17期理事会執行部の責任のもとに、11/8付にて、東京大学あてに「論文不正問題に関する早急な情報開示の要望書」を提出しており、12月10日の理事会承認を経て、同日深夜、同要望書は学会HPに掲載された。

本年会の初日夜（2012年12月11日）に緊急フォーラム「研究不正を考える― PIの立場から、若手の立場から―」を開催し、会員各位より貴重な意見を頂戴している。第17期理事会の任期はあとわずかであるが、責任をもって次期の第18期理事会に申し送りを行ない、論文問題についての対応を進めていきたいとの報告がなされた。

2）庶務報告

石野史敏庶務幹事より会員現況についての報告が行われた。

会員現況：〔2012年12月1日現在〕名誉会員1名、正会員9,930名、学生会員5,319名、賛助会員31団体、総計15,281名（前年12月対比、−196）

3）編集『Genes to Cells』報告

上村 匡編集幹事より『Genes to Cells』の刊行状況につき報告がなされた。

2011年より一新した表紙デザインは国内外の購読者から高い評価を得ており、2013年も日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙デザインの制作を継続していくとの説明がなされた（スライド：2011 ～ 2012年の表紙 /cover art一覧）。

論文投稿数であるが、昨年より若干持ち直してはいるものの安定的な水準を維持する数にはなっておらず、短報、method paper 等も歓迎するなどの周知を続けていきたい。

本学会誌は、生命科学のあらゆる分野、そして理論解析やフィールドワークを含む多様なアプローチなど、幅広い分野の研究者から論文を投稿してもらえるようの投稿規程も改訂している。会員各位においては引き続き、積極的な投稿をお願いしたい。

4）高等学校との連携による社会貢献活動について（高校などへの講師派遣事業）

篠原 彰広報幹事より、本事業の概要についての報告が行われた。

本年11月、「高校などへの講師派遣事業の協力のお願い」をHPに掲載し、同時期に会員メール配信を行った。本事業は昨年の理事会・総会において決議されているが、その具体的内容は次のとおりである。

①分子生物学の講演、授業などを必要としている高校（中学を含む）への会員の派遣

②最新の分子生物学の講演会、講習を必要としている高校（中学を含む）教師の集まりへの会員の派遣

同協力依頼に対し、12月6日現在、152名の会員より協力回答を得ており、その講師一覧のデータベース作成作業もほぼ完成しつつあることが報告された。

来期（18期）の理事会にて、具体的にどのように出前授業をマッチングしていくか、その運用方法を今後詰めていきたいとの報告がなされた。

5．議　事

1）平成24年度（2012度）収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より総会資料（2～10頁）に基づき、平成24度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。本決算の監査については、以下のように報告された。

2012年10月30日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受け（総会資料の独立監査人の監査報告書を参照）、同年11月15日に、勝木元也監事、町田泰則監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2）平成25度（2013年度）収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より総会資料（11～12頁）に基づき、25年度の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は異議なく承認された。

3）第18期監事選任の件

定款第14条に基づき、小原理事長より第18期監事として郷 通子会員、永田恭介会員が推薦され、承認（選任確認）された。

6．阿形清和第35回年会長より、年会開催状況につき報告と挨拶がなされた。

今年の年会は、邦題としては「～年会の新しいスタイルを摸索する～」、英文タイトルとしては“Trial of IT-technology-based member-member communication at the annual meeting”としており、ITを駆使することで、従来の〈演題を中心とした年会〉から、〈個々の会員の顔がわかる年会〉への質的変換を図ろうとしたことが説明された。巨大学会の母集団の多さがマイナスとなるのではなく、母集団の多さを活かしていろいろな個性と出会うことで、個々の研究のひろがりを促すことを目標としたことが報告された。

本日現在、参加者数は6,220名であり、順調に年会運営が進んでいる（最終の参加者数は市民公開講座を除き6,600名であった）。総演題数としては3,960にのぼり、会期前半の2日間が終ったところであるが、各会場ともに例年以上の賑わいをみせていると感じている。

年会の柱となるシンポジウムについては、分子生物学会らしさが出るように、ゲノムやエピジェネティクスなどをキーワードとしてフロント・サイエンスが異分野の若手研究者にも楽しめるように工夫した。そして、シンポジウムと並行して公募でつくられたワークショップを100ほど設定している。年会としては、whole genome, personal genome元年として位置づけられたのではないかとの説明がなされた。全般的に新しい試みについても好評を頂いているようである。

最後に、多大なサポートを頂いた日本製薬団体連合会と福岡市に対しての謝辞が述べられた。

7．近藤 滋第36回年会長より、2013年の年会開催企画案につき報告がなされた。

○会　期：2013年12月3日㈫～6日㈮

○会　場：神戸ポートアイランド

≪年会開催コンセプト≫

最近、生命科学がビッグサイエンス化する傾向にあるが、原点は、やはり個々の研究者の問題意識と創意工夫である。グループ研究に埋没しがちな若手研究者に、サイエンスの楽しさと希望をもってもらえるような様々な仕掛け･工夫を凝らした「今までにない学会」を開催したいとの報告がなされた。

本年会は、学術プログラムはプログラム委員会が担当し、特別企画については、組織委員会が企画・運営を行うといった役割分担で準備を進めている。現段階では、特別企画として以下のような内容を検討している旨の説明がなされた。

≪特別企画≫（案）

●海外ポスドク呼び寄せ

（最大200名に10万円の旅費を支給し、特別セッションに参加してもらう）

●薬品ベンチャー主催シンポジウム
（国内薬品ベンチャー関係者によるシンポジウムを開催）

●ポスター発表 PodCast 化
（ポスターの概要を Podcast でダウンロードできるようにする）

●生命科学研究を考えるガチ議論
（科学政策の諸問題を議論するウェブサイトを開設。半年間の議論の後、年会で直接対決）

●分生版 TED
（斬新で「聞く価値」のあるアイデアのプレゼンテーションショーを行う）

●学会とジャズの融合
（ポスター会場を使ってのミキサーの時、あるいは会期中の空いている部屋を利用し、学会員で構成されたバンドの演奏を行う）

●ここだけ 2050 年シンポジウム
（40 年後、という設定でのアカデミックシンポ）

8．ビデオレター（約 4 分半）により、大隅典子第 18 期理事長挨拶が行われた。メッセージの要旨は次のとおりであった。

「学会活動は、科学者である会員の情報交換やアイデアの醸成を促す場として機能することが第一義に大切であるが、現代においては社会との関わりのインターフェースとしての役割も担っていると考えられる。とくに、生命科学分野における基礎系の学会として最大数の会員から構成される本学会は、少なからぬ責務を負っていると思われる。

次期理事長として、第 18 期の間に以下のことに取り組みたい。

1）若手キャリアパスの支援
2）科学研究教育施策に関するアドボカシー
3）研究倫理に関する意識啓発

最後に、男女共同参画学協会連絡会主催大規模アンケートへの協力依頼がなされた。」

9．林議長より閉会の挨拶があり、第 35 回総会が終了した。

上記、平成 25 年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成 24 年 12 月 12 日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
平成 25 年度通常総会
議　　長　林　茂生　㊞
議事録署名人　小原雄治　㊞
議事録署名人　阿形清和　㊞

平成 24 年度（2012 年度）収支決算報告

平成 24 年度（2012 年度）収支決算報告書

平成 23 年 10 月 1 日から平成 24 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	予算額	決算額	備　　考
Ⅰ　収入の部			
1　入会金収入	1,100,000	1,652,000	
正 会 員	300,000	543,000	
学生会員	800,000	1,109,000	
2　会費収入	71,190,000	69,211,000	
正 会 員（海外在住含む）	58,500,000	58,216,000	
学生会員（海外在住含む）	11,130,000	9,595,000	
賛助会員	1,560,000	1,400,000	
3　事業収入	236,130,000	242,975,007	
①分子生物学・学術研究事業	226,130,000	227,796,768	
年会	224,630,000	226,666,105	第 34 回年会（年会収入合計額－本部補助金定額 500 万円）
春季シンポジウム	1,500,000	1,130,663	第 12 回春季シンポジウム（スクール形式）
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	10,000,000	15,178,239	
Genes to Cells 出版収入	9,500,000	14,702,559	Profit Share 13,702,559 円　2011 年分編集補助金 100 万円
30 周年記念出版収入	500,000	475,680	「分子生物学に魅せられた人々」「21 世紀の分子生物学」印税
③その他の事業	0	0	
その他の事業	0	0	
4　助成金・補助金収入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より（奨励賞副賞、選考経費）
5　雑収入・預金利息	500,000	91,838	利息収入、ファーマバイオ（Bioedit 英文校正）等
当期収入合計（A）	310,220,000	315,229,845	
前期繰越収支差額	176,616,828	176,616,828	
収入合計（B）	486,836,828	491,846,673	
Ⅱ　支出の部			
1　事業費	260,580,000	252,280,231	
①分子生物学・学術研究事業	243,130,000	235,030,759	＜学術集会の開催等＞
年会	229,630,000	221,347,056	第 34 回年会（年会支出小計）
春季シンポジウム	6,500,000	6,683,703	第 12 回春季シンポジウム（石和温泉）
国際会議支援（補助金）	7,000,000	7,000,000	第 1 回（2013 年）国際会議支援、会議 4 件へ計 700 万円を助成
②普及啓発事業（ＨＰ・刊行物等）	11,850,000	12,888,251	
会報刊行費	3,500,000	3,027,990	会報 100、101、102 号
Genes to Cells 編集費	2,000,000	3,746,261	編集経費については年 800 万円まで出版社負担
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	4,350,000	
ホームページ関係費	2,000,000	1,764,000	ホームページ 10 万円× 12 カ月＋メール配信費用
③その他の事業	5,600,000	4,361,221	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,301,705	副賞 2 名分 100 万円、賞状代、選考委員会経費等
男女共同参画事業費	1,500,000	788,537	
若手教育問題ＷＧ	1,200,000	800,449	
創立 30 周年記念・出版事業	300,000	268,800	「21 世紀の分子生物学」学会買取分
社会貢献活動	500,000	44,240	平成 24 年度 SSH・学会ブース出展（2012.8 パシフィコ横浜）
事業費その他	500,000	921,240	科学政策ＷＧ 泊り込み会議を 2 度開催、生科連会費、その他
理事選挙	300,000	236,250	Web 選挙システムブラウザー調整
2　管理費	52,550,000	51,759,774	
事務所賃料	3,800,000	3,699,136	賃料・共益費、光熱費
給与手当	24,000,000	24,725,590	事務局スタッフ 4 名（うち非常勤職員 1 名）
法定福利費	3,700,000	3,597,724	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	50,000	52,991	職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	1,356,600	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,400,000	2,394,000	会員管理サーバの運用・保守
印刷費	1,700,000	1,499,604	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	10,000,000	9,925,838	年会プログラム集、会報、会費請求書、送料等
旅費交通費	2,300,000	2,001,150	
会議費	500,000	272,920	定例理事会、他
支払手数料	300,000	176,310	
消耗品費	900,000	724,081	封筒印刷代含む
雑費	1,400,000	1,333,829	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	0	1	当期償却（複合機分）
3　租税公課	2,000,000	1,099,700	納税済 635,200 円　未払消費税 394,500 円　地方税 70,000 円
4　特定預金支出	1,200,000	1,205,000	退職給付引当金繰入（規程に準拠）
5　予備費	500,000	0	
当期支出合計（C）	316,830,000	306,344,705	
当期収支差額（A）－（C）	−6,610,000	8,885,140	
次期繰越収支差額（B）－（C）	170,006,828	185,501,968	

（単位：円）

平成 24 年度（2012 年度）貸借対照表

平成 24 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金	299,863,871		
前払費用	5,232,326		
立替金	7,741,380		
流動資産合計		312,837,577	
2　固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			314,639,578
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金	573,265		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	394,500		
前受会費	476,500		
前受金	1,000,000		
預り金　1			
（富澤基金）	120,160,165		
預り金　2	399,180		
流動負債合計		123,073,610	
2　固定負債			
退職給付引当金	6,064,000		
固定負債合計		6,064,000	
負債合計			129,137,610
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		176,616,828	
当期正味財産増加額		8,885,140	
正味財産合計			185,501,968
負債及び正味財産合計			314,639,578

（単位：円）

平成 24 年度（2012 年度）財産目録

平成 24 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金			
現金	659,798		
郵便振替　00100-2-465016	5,480		
郵便振替　00110-1-901302	19,899,890		
普通預金　三菱東京 UFJ 銀行　春日町支店	1,866,861		
普通預金　三菱東京 UFJ 銀行　所沢支店	1,478,814		
普通預金　三菱 UFJ 信託銀行　上野支店	214,212		
普通預金　三井住友銀行　飯田橋支店	69,081,352		
普通預金　三井住友信託銀行　芝営業部	7,208,288		
普通預金　静岡銀行　東京支店	20,160,165		
定期預金　三菱東京 UFJ 銀行　春日町支店	10,106,164		
定期預金　みずほ銀行　本郷支店	10,089,983		
定期預金　三井住友銀行　飯田橋支店	20,000,000		
定期預金　三菱 UFJ 信託銀行　上野支店	10,000,000		
定期預金　三井住友信託銀行　芝営業部	10,000,000		
定期預金　三井住友信託銀行　本店営業部	19,092,864		
定期預金　静岡銀行　東京支店	100,000,000		
前払費用　事務所家賃 10 月分	310,218		
前払費用　事務所火災保険 H24.10－H26.8 月分	23,958		
前払費用　2012 年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000		
前払費用　第 36 回（2013）年会企画会議等費用	504,150		
前払費用　新理事会準備会議　会場費用	33,000		
前払費用　男女共同学協会連絡会シンポ関係費用	11,000		
立替金　　編集経費（2012 年 1 月分以降）	7,741,380		
流動資産合計		312,837,577	
2　固定資産			
工具器具備品　電話取付一式	1		
敷金　学会事務所・編集室	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			314,639,578
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金　通信運搬費	50,198		
（外部倉庫、宅急便代、NTT、メールサーバ）			
未払金　印刷費（コピー・FAX 代）	32,540		
未払金　クレジットカード決済処理手数料（GMO）	33,747		
未払金　社会保険料	456,780		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	394,500		
前受会費　平成 25 年度以降会費	476,500		
前受金　GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000		
預り金 1　富澤基金	120,160,165		
預り金 2　源泉所得税	399,180		
流動負債合計		123,073,610	
2　固定負債			
退職給付引当金	6,064,000		
固定負債合計		6,064,000	
負債合計			129,137,610
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		176,616,828	
当期正味財産増加額		8,885,140	
正味財産合計			185,501,968
負債及び正味財産合計			314,639,578

（単位：円）

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」
平成 24 年（2012 年度）会計報告

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

●平成 24 年度（2012 年度）富澤基金 決算報告書

平成 23 年 10 月 1 日から平成 24 年 9 月 30 日まで

科　　目	決　算　額	備　　考
収入の部		
預金利息	45,629	
当期収入合計	45,629	
前期繰越金	135,479,149	
合　　計	135,524,778	
支出の部		
研究助成金	15,000,000	第 2 回研究助成者は 5 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	179,697	ヒアリング（2012.6.20）
選考経費 / 旅費	101,000	〃
事務・雑費	83,916	貸金庫使用料（静岡銀行）25,200 円 送金手数料等 6,405 円、旅費（ヒアリング）29,400 円 一次審査用ダンボール代・ファイル購入 22,911 円
当期支出合計	15,364,613	
次期繰越金	120,160,165	
合　　計	135,524,778	

●平成 24 年度（2012 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 24 年 9 月 30 日現在

借　　方		貸　　方	
科　　目	金　　額	科　　目	金　　額
資産の部		負債の部	
普通預金	20,160,165	流動負債	0
定期預金	100,000,000		
		基金会計（期首）	135,479,149
		今年度収支差額	−15,318,984
		基金正味財産	120,160,165
合　　計	120,160,165	合　　計	120,160,165

●平成 24 年度（2012 年度）富澤基金 財産目録

平成 24 年 9 月 30 日現在

科　　目	摘　　要	金　　額
普通預金	静岡銀行 東京支店	20,160,165
定期預金	静岡銀行 東京支店	100,000,000
合　　計		120,160,165

平成 24 年度（2012 年度）個別注記表

平成 23 年 10 月 1 日から平成 24 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
   定率法によっております。

2. 固定資産の減価償却累計額
   955,846 円

3. 退職給付引当金の計上基準
   職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、
   当年度末において発生していると認められる額を計上しております。

4. 担保に供している資産はありません。

5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 24 年度（2012 年度）決算に関して、平成 24 年 10 月 30 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 24 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める．との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 15 日に、学会事務所において、勝木元也監事、町田泰則監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 17 期理事長　小　原　雄　治
理事（会計幹事）塩　見　春　彦

監査報告書

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
理事長　　小原　雄治　殿

平成２４年11月15日
特定非営利活動法人　日本分子生物学会
監事　勝木元也

平成２４年11月15日
特定非営利活動法人　日本分子生物学会
監事　町田泰則

私たちは、日本分子生物学会の平成２４年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以　上

独立監査人の監査報告書

平成２４年１０月３０日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
理事長　　小原　雄治　殿

宮城公認会計士事務所
公認会計士　宮城秀夫

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の　平成２３年１０月１日から平成２４年９月３０日までの平成２４年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録並びに平成２３年１０月１日から平成２４年９月３０日までの平成２４年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者にあり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成２４年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の平成２４年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以　上

平成 25 年度（2013 年度）収支予算

平成 25 年度（2013 年度）収支予算

平成 24 年 10 月 1 日から平成 25 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	24 年度予算	備　　考
Ⅰ　収入の部		
1　入会金収入	1,300,000	
正 会 員	400,000	1,000 円× 400 名
学生会員	900,000	1,000 円× 900 名
2　会費収入	70,360,000	
正 会 員（海外在住含む）	58,500,000	6,500 円× 10,000 名×約 90%
学生会員（海外在住含む）	10,500,000	3,000 円× 5,000 名×約 70%
賛助会員	1,360,000	40,000 円× 34 口（31 社）
3　事業収入	224,300,000	
①分子生物学・学術研究事業	212,750,000	〈学術集会の開催等〉
年会	212,750,000	第 35 回年会（支出予算額－学会補助金定額分 500 万円）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	11,550,000	
Genes to Cells 出版収入	11,500,000	ワイリーブラックウェル社より Profit Share 1050 万円、編集定額補助金 100 万円
その他の出版収入	50,000	創立 30 周年企画 3 部作・著作権使用料（東京化学同人）
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4　助成金・補助金収入	1,300,000	三菱化学より、奨励賞副賞および選考経費として
5　雑収入	250,000	利息収入、出版社著作権管理機構分配金、ファーマバイオ（Bioedit 英文校正）等
当期収入合計（A）	297,510,000	
前期繰越収支差額	185,500,000	※ 24 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計（B）	483,010,000	
Ⅱ　支出の部		
1　事業費	245,700,000	
①分子生物学・学術研究事業	225,050,000	〈学術集会の開催等〉
年会	217,750,000	第 35 回年会（定額補助金 500 万円は収入科目の中で精算）＊実質 500 万円を補助
年会その他	300,000	年会 Web アンケート設定と集計取りまとめ
国際会議支援（補助金）	7,000,000	2014 年開催の国際会議への支援（補助金）
②普及啓発事業（HP・刊行物等）	15,050,000	
会報刊行費	3,500,000	
Genes to Cells 編集費	5,200,000	学会負担分（編集費用 1320 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ）
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い（フリーアクセス料 100 万円を含む）
ホームページ関係費	2,000,000	10 万円× 12 カ月、メール配信 60 万円、予備費 20 万円
③その他の事業	5,600,000	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	
各種委員会	2,700,000	男女共同参画（若手キャリアパス）・学協会連絡会大規模アンケート解析等 150 万円
社会貢献・教育活動事業	800,000	研究倫理全般・年会ランチョンセミナー弁当代含む 120 万円
事業費その他	800,000	科学政策、他
2　管理費	56,760,000	
事務所賃料	3,800,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	27,500,000	学会事務局（スタッフ人員の強化）
法定福利費	3,700,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	60,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,400,000	サーバー運用保守、UFJ 社決済基盤使用料含む
印刷費	1,700,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	10,500,000	会報、年会プログラム集（重量増加により送料 UP）、会費請求書の送料
旅費交通費	2,500,000	理事会、委員会、執行部会議、他
会議費	500,000	理事会、委員会、他
支払手数料	250,000	
消耗品費	850,000	封筒印刷代含む
雑費	1,500,000	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、他
3　租税公課	2,000,000	消費税、法人税等
4　特定預金支出	1,250,000	退職給付引当金
5　予備費	500,000	
当期支出合計（C）	306,210,000	
当期収支差額（A）－（C）	−8,700,000	
次期繰越収支差額（B）－（C）	176,800,000	

（単位：円）

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物
   1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
   2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
   3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
   4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先
日本分子生物学会・賞推薦委員長　一條　秀憲
〒102-0072　千代田区飯田橋2-11-5
人材開発ビル4階
日本分子生物学会事務局気付

※ 研究助成についての送付先
日本分子生物学会・研究助成選考委員長　月田早智子
〒102-0072　千代田区飯田橋2-11-5
人材開発ビル4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がありましたら、学会事務局までお問合わせ下さい。

研究助成一覧

名　称	連絡先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
第44回三菱財団自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎（03）3214－5754 〒100－0005 千代田区丸の内2－3－1	総額2億5,000万円	2013年 2月4日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。
山田科学振興財団 2013年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 ☎（06）6758－3745 〒544－8666 大阪市生野区巽西1－8－1	15件程度 （本学会の推薦枠は5件）	2013年 2月28日	1件当たり 100～500万円、 総額3,000万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 〔推薦書は山田財団HPよりダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/〕
第29回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎（03）3263－1722 〒102－8472 千代田区一番町8 日本学術振興会内	1件 （1件）	2013年＊ 5月10日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。第28回の授賞分野は「神経生物学」。
第30回持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎（03）3357－1282 〒160－0003 新宿区本塩町7－6 四谷ワイズビル	2件以内 （1件）	2013年＊ 7月31日	1件1,000万円	学術賞は次の6項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 ⑴バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究 ⑵バイオ技術を基盤とするゲノム機能／病態解析に関する研究 ⑶免疫／アレルギー／炎症の治療ならびに制御に関する研究 ⑷循環器／血液疾患の病態解析／治療制御に関する研究 ⑸創薬・創剤の基盤に関する研究 ⑹創薬の臨床応用に関する研究
第31回研究助成		総額 2億4,000万円	2013年＊ 6月21日	1件　300万円	
第30回国内および海外留学補助金		総額 1,000万円	2013年＊ 6月21日	1件　50万円	
平成26年度笹川科学研究助成	(公財)日本科学協会 ☎（03）6229－5365 〒107－0052 港区赤坂1－2－2 日本財団ビル	生物系で約80件 （24年度実績）	募集期間 2013年＊ 10月1日 ～ 10月15日	1件当たり100万円まで	人文・社会科学および自然科学（医学を除く）の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。

名　称	連絡先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
上　原　賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎（03）3985－3500 〒171－0033 豊島区高田3－26－3	2件以内 (1件)	2013年＊ 9月6日	金牌、 2,000万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第30回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 ☎（03）3477－2738 〒150－0036 渋谷区南平台町15－15－601	5件以内 (2件)	2013年＊ 9月20日	賞状、金メダル、 200万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者（ただし締切日現在満50歳未満）。
第6回井上リサーチアウォード		4名以内 (うち1名以上女性研究者)	2013年＊ 7月31日	1人当たり 500万円 (研究期間は2年)	開拓的発展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。期間は2年。
第22回木原記念財団学術賞	㈶木原記念横浜生命科学振興財団 ☎（045）502－4810 〒230－0045 横浜市鶴見区末広町1－6	1件 (1件)	2013年＊ 9月30日	賞状、 200万円	最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、原則として締切日現在50歳以下の者。
住友財団2013年度基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎（03）5473－0161 〒105－0012 港区芝大門1－12－6 住友芝大門ビル2号館	総額 1億6,000万円 100件程度	2013年＊ 6月28日	1件当たり500万円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの。若手研究者（個人またはグループ）を対象とする。
第54回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎（03）3561－7736 〒104－0061 中央区銀座3－7－12	2件 (1件)	2013年 1月31日	副賞1,000万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎（03）6734－4071 〒100－8959 千代田区霞が関3－2－2	科学技術賞140件(年)のうち、研究部門は40件程度 若手科学者賞は100名程度 (学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2013年＊ 7月20日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を誉げた40歳未満の若手研究個人。
平成25年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎（075）823－3240 〒604－8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町1	1件 (推薦枠は若干件)	2013年＊ 9月30日	賞状、賞牌、 副賞300万円	科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、近年著しい成果をあげた功労者を対象とする。
島津科学技術振興財団研究開発助成		総額 1,200万円	2013年＊ 9月30日	1件当たり 100万円以下	上記同様を研究対象とする、国内の研究機関に所属する45歳以下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎（047）350－6103 〒279－8555 浦安市美浜1－8－1 東レビル	2件前後 (2件)	2013年＊ 10月10日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大きい者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1億3,000万円 10件程度 (2件)	2013年＊ 10月10日	特に定めず最大3,000万円程度まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者（原則として45歳以下）。
ノバルティス研究奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎（03）5464－1460 〒106－0031 港区西麻布4－16－13 西麻布28森ビル10F	約35件 指定機関からの推薦必要	2013年＊ 9月13日	1件 100万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
第45回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎（03）3813－3005 〒113－0033 文京区本郷3－42－6 NKDビル8階	1件 (1件)	2013年＊ 10月1日	金メダル、 1000万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第45回海外学者招へい助成金		前期・後期各10件	2013年＊ 6月3日・ 10月1日	1件 20～80万円まで（エリアによる）	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。

名　称	連絡先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
ブレインサイエンス財団研究助成	(公財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273－2565 〒 104－0028 中央区八重洲 2－6－20	8 ～ 12 件	2013 年＊ 10 月 11 日	1 件 100 万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原仲晃記念賞		1 件		1 件 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 50 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2014 年＊ 1 月 10 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
平成 26 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535－2117 〒 550－8668 大阪市西区新町 1－1－17	10 数件	2013 年＊ 11 月 30 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
第 10 回日本学術振興会賞	㈱日本学術振興会 ☎ (03) 3263－0912 〒 102－8472 千代田区一番町 8 番地	25 件程度 （機関長推薦扱いとして学会推薦枠も若干件あり）	2013 年＊ 4 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者（45 歳未満）。
第 4 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2013 年＊ 6 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰（34 歳未満）。
㈶材料科学技術振興財団 山﨑貞一賞	㈶材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415－2200 〒 157－0067 世田谷区喜多見 1－18－6	各分野 1 件	2013 年 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 25 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454－0598 〒 430－0926 浜松市中区砂山町 325－6	総額 5,000 万円	2013 年 7 月 31 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2013 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540－7453 〒 104－8011 中央区築地 5－3－2	ここ最近は 4 ～ 5 件 (1 件)	2013 年＊ 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像)と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 25 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725－2576 〒 194－8533 町田市旭町 3－6－6	25 件 総額 5,000 万円	2013 年＊ 8 月 31 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。
平成 26 年度(第 3 回) 三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 3780－2317 〒 150－0021 渋谷区恵比寿西 2－20－3 代官山 CA ビル	自然科学部門で 2 件以内 (1 件)	2013 年＊ 8 月 31 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。

名　　称	連　絡　先	件　　数	締　　切	助成内容等	概　　要
一般研究助成	（公財）発酵研究所 ☎（06）6300－6555 〒532－8686 大阪市淀川区十三本町 2－17－85	研究課題ごとに10件	2013年＊ 8月20日	1件 300万円	日本の研究機関に所属し、微生物（細菌、アーキア、菌類、微細藻類）に関する研究を行っている研究者。 研究課題 ⑴微生物の分類、生態、進化に関する研究 ⑵発酵、応用微生物に関する研究 ⑶健康、環境に関与する微生物の研究
大型研究助成		合計4件	2013年＊ 8月20日	1件 1,000万円	
若手研究者助成		1件	2013年＊ 8月20日	年間500万円 助成期間3年間	日本の研究機関に所属し、微生物（細菌、アーキア、菌類、微細藻類）に関する研究を行う40歳以下のポスドク。
寄付講座助成		1件	2013年＊ 9月20日	2億5千万円 設置期間5年間	微生物の研究を行う寄付講座の設置を希望する日本の国立大学、公立大学および私立大学のいずれかに属する部局（研究科、学部または研究所）を対象に、独創性があり、新しい発見を目指した研究に助成。

●件数の（　　）内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

＊は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。
締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

●学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いします。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第 15 回マリンバイオテクノロジー学会大会

第 15 回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催いたします。

会　　期：平成 25 年 6 月 1 日㈯～ 2 日㈰
会　　場：沖縄県市町村自治会館
大会役員：大会会長　　須田彰一郎
　　琉球大学理学部海洋自然科学科 教授
　　実行委員　　廣瀬（安元）美奈
　　㈱トロピカルテクノセンター
　　望月智代
　　沖縄県工業技術センター
大会事務局：〒 903−0213　沖縄県中頭郡西原町字千原 1
　　琉球大学理学部海洋自然科学科生物系内
　　第 15 回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会
　　TEL：098−895−8564
　　FAX：098−895−8576
　　（できるだけメールでご連絡下さい）
　　E-MAIL：mbio2013.okinawa@gmail.com

大会の内容：
1．一般講演（口頭発表、ポスター発表）
2．シンポジウム（一般）
＊シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式：
1．口 頭 発 表：一般講演は質疑含み 15 分
　　液晶プロジェクター使用
2．ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション：
1．微生物　2．微細藻　3．海藻・付着生物
4．魚介類　5．天然物化学・未利用資源
6．バイオミネラリゼーション　7．マリンゲノム
8．環境・環境適応　9．その他

発表申込みの締め切り：平成 25 年 3 月 8 日㈮必着
講演要旨の締め切り：平成 25 年 3 月22 日㈮必着
事前参加登録締め切り：平成 25 年 4 月30 日㈫必着
事前参加登録費：
会員 5,000 円　学生 2,000 円
非会員 9,000 円　非会員学生 4,000 円
当日参加費：
会員 7,000 円　学生 3,000 円
非会員 10,000 円　非会員学生 5,000 円
※協賛いただきました団体（分子生物学会）の会員の方は、当学会会員と同等の参加費で参加できます。発表は学会会員に限ります。

講演申し込み方法および参加登録方法の詳細は、大会ホームページでご確認下さい。
第 15 回大会ホームページアドレス：
http://www.algae.sci.u-ryukyu.ac.jp/pg66.html
学会ホームページ： http://marinebiotechnology.jp/

○「酵母からのエピジェネティクス研究へのメッセージ～酵母が明らかにする生命科学の最先端～」開催のお知らせ

Message from yeast to Epigenetics
～ Yeast clarifies the frontiers of life science ～

同じ DNA 配列から多様な遺伝子発現制御を生みだすエピジェネティックな制御機構は、ヒトなどの分化・発生や疾患のほか、多能性幹細胞“iPS 細胞形成”においても重要な役割を担います。しかし、多細胞生物の多様な細胞を生むこの制御の詳細な分子機構が単細胞モデル生物“酵母”の研究により明らかにされて来た事実は、日本であまり認識されていません。

学会等では同じ生物種を用いて研究している研究者が、踏み込んで議論できる場が少ないのが事実であり、本国際会議は、エピジェネティックス研究を牽引する国内外の酵母研究者と最新の研究成果について議論し、周辺領域を巻き込んだ次世代のエピジェネティックス研究の方向性を見出し、提案することを目的とし開催させて頂きます。

また、学生さんが海外の国際会議に参加出来る機会は少なく、一線で活躍する海外の研究者の講演を直接聞くことは、学生さんの将来において重要であると考えており、学生さんの参加も歓迎します。

会　期：平成 25 年 9 月 2 日㈪～ 4 日㈬
会　場：グランディア芳泉（福井県あわら市）
主　催：福井大学
共　催：JST・日本分子生物学会
参加申し込み締め切り：平成 25 年 7 月 19 日㈮
問い合わせ先：酵母エピジェネティクス国際会議　事務局
　　代表　沖　昌也
　　（福井大学大学院　工学研究科　生物応用化学専攻）
　　〒 910−0017　福井県福井市文京 3−9−1
　　TEL：0776−27−8640
　　FAX：0776−27−8747
　　E-mail：ma4sa6ya@u-fukui.ac.jp

尚、詳細につきましては下記 URL をご覧下さい。
http://acbio2.acbio.u-fukui.ac.jp/biochem/oki-hp/yeastepigenetics/index.html

日本分子生物学会　賛助会員一覧

（2013 年 2 月現在）

アサヒビール株式会社 食の基盤技術研究所
株式会社エー・イー企画
沖縄科学技術大学院大学
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究本部研究推進部
コスモ・バイオ株式会社 開発部
第一三共株式会社 抗体医薬研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 マーケティング部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究開発管理グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 経営戦略部門 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
ライフテクノロジーズジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

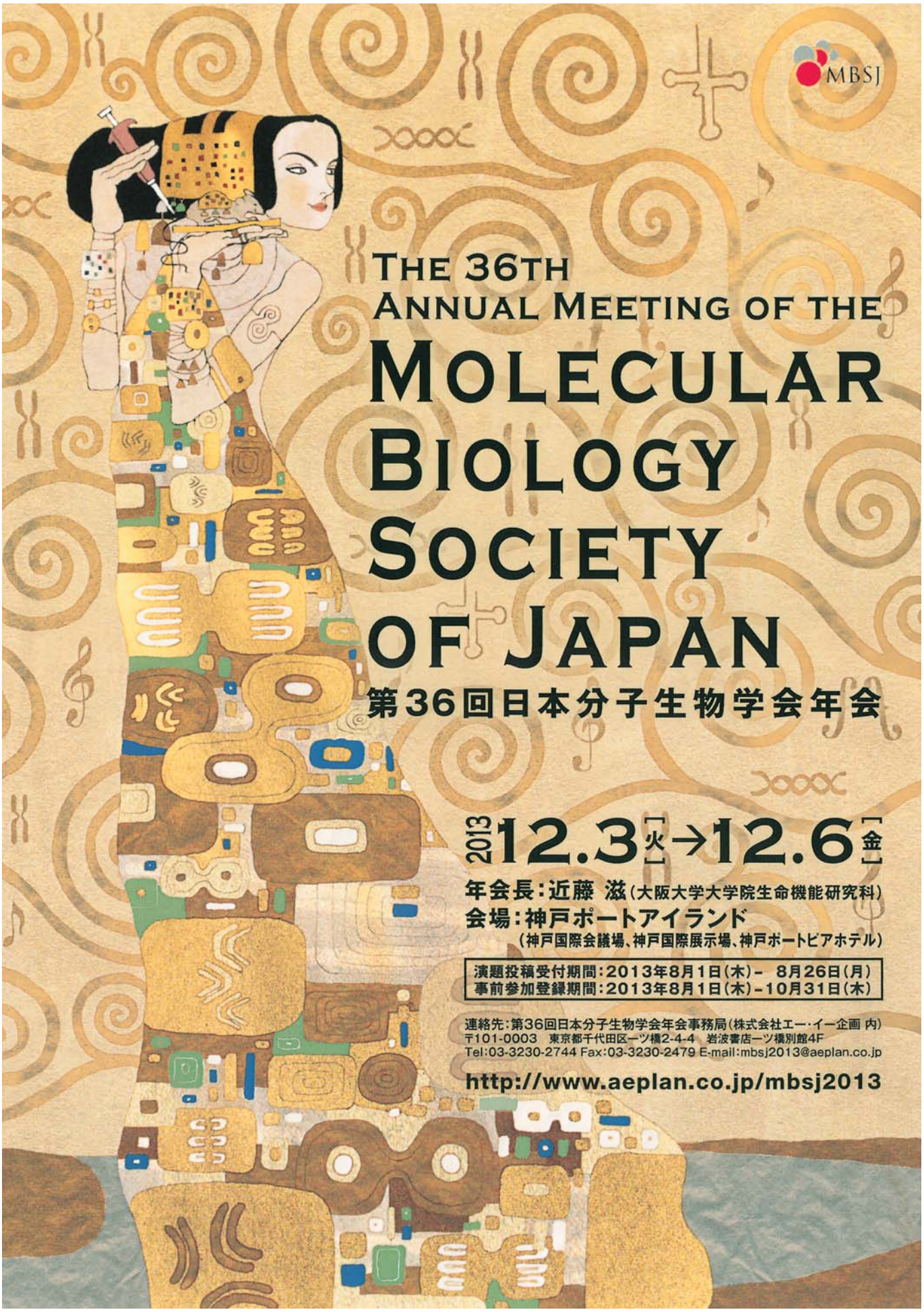
（28 社、50 音順）

■第 36 回（2013年）日本分子生物学会年会 公式サイト
URL: http://www.aeplan.co.jp/mbsj2013/

Facebook をはじめました！

特定非営利活動法人
日本分子生物学会　事務局

〒 102−0072　東京都千代田区飯田橋 2−11−5
人材開発ビル 4 階
TEL: 03−3556−9600　FAX: 03−3556−9611
E-mail: info@mbsj.jp


MBSJ
THE 36TH
ANNUAL MEETING OF THE
MOLECULAR
BIOLOGY
SOCIETY
OF JAPAN
第36回日本分子生物学会年会
2013 12.3[火]→12.6[金]
年会長：近藤 滋（大阪大学大学院生命機能研究科）
会場：神戸ポートアイランド
（神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル）
演題投稿受付期間：2013年8月1日（木）- 8月26日（月）
事前参加登録期間：2013年8月1日（木）-10月31日（木）
連絡先：第36回日本分子生物学会年会事務局（株式会社エー・イー企画 内）
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 岩波書店一ツ橋別館4F
Tel:03-3230-2744 Fax:03-3230-2479 E-mail:mbsj2013@aeplan.co.jp
http://www.aeplan.co.jp/mbsj2013

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

（年 3 回刊行）

第 104 号（2013年2月）

発　行――特定非営利活動法人　日本分子生物学会

代表者――大隅　典子